

---

# 内閣官房機密費殺人事件

徳永信行

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

内閣官房機密費殺人事件

### 【Nコード】

N3279M

### 【作者名】

徳永信行

### 【あらすじ】

内閣官房機密費が使用された殺人事件を捜査14課の城島警部が紐解いてゆくサスペンス。

初回記載：2010・05・28

## 内閣官房機密費殺人事件

原作；徳永 信行

：この物語は全てフィクションで、<sup>サスペンス</sup>実在のものとは全て関係ありません。

top

初回記載：2010・05・28

第一章 事件は隅田川の河口から始まった。

今日は非番の城島警部、妻の絹代（45歳）にせがまれ、汐留の105階建て森慶スカイビューー88階にあるイタリアンレストランで昼食をし、銀座で買い物をする事になった。

二人は丁度12時に予約した席に、片手にナプキンをスマートに持ち、白と黒の制服と蝶ネクタイが良く似合う若いボーイに案内され、見晴らしの良い窓側テーブルに着席した。

城島と妻の絹代は普段着用しない特別なスーツと花柄の艶やかなワンピースと薄手のシルクで作られたシヨール姿で、わりと上手く御洒落着を着こなした中年の紳士、淑女に見えた。

食事はワインから進み、特に城島がこの日の為に予約しておいた

絹代が好む鶏肉料理を中心にして、破格のメニューを分不相応とは思ったが、日頃の感謝を込めて全てをホストしていた。

このビルがスカイビューと云うだけあって、その眺望は素晴らしく、東京の全部と富士山までが一望できる様であったが、この日はあいにく中国大陸からの黄砂で視界があまり良くなかった。

しかし、何時になく城島は上機嫌で妻の絹代と歓談し、出された食事を美味しく味わっていた。

城島が異変を感じたのは、デザート後のコーヒーを少し口にした時である。

どこから飛んできたのかわからないが、6機のヘリが、城島達がいる88階より下の高度で隅田川河口にある豊海運動公園方向に飛び、あたりを旋回しているのが見えた。

城島は長年の経験から、6機のヘリはメディア各社のものであると瞬間的に判断できた。

それから約5分も経たないうちに赤灯をつけ、城島がいる88階まで聴こえたかと思えるサイレンを鳴らした多数のパトカーが豊海運動公園に集結しだすのが見え、続いて多数の警察官が河口付近に集まり速い動きをするのが見えた。

豊海運動公園は城島が勤務する霞が関PP署の管轄管内である。

城島は絹代に「すまん、ちょっと102階の展望室に行ってくるので、お前はここに居てくれ」と言い残し、レストランロビーにあるエレベーターに駆け込み、102階展望室に向かった。

約20秒足らずで高速エレベータは102階展望室に到着した。そこは300?程の広いスペースに約20台ほどの昔からの望遠鏡と高倍率のデジタルパノラマ望遠小部屋が設置されており、展望室内は小学生、中学生と思える子供たちで混雑していた。

城島はデジタルパノラマ望遠小部屋で遊んでいた小学生らしい男の子に「悪いが、大切なことを見たいのでおじさんに代わって」と頼んだ。

男の子は「いやだ!どうして代わらないといけないの?・・・お金も入れているのに」と子供なりの意思表示をした。城島は大人げないとは思ったが「おじさんは警察官で急ぐので悪いが代わってくれ」と警察手帳を見せた。

本物の刑事を前にして、男の子は目を輝かせながら「何か事件?なら協力するよ!」と云ってすぐさま席を立ち、城島が「有難う」と云ってデジタルパノラマ望遠鏡を使用する様を興味深そうに覗き込んだ。

城島が豊海運動公園に照準を合わすことは簡単で有った。

そこには、霞が関PP署の捜査員の中に、城島の部下で第14課白石警部補、黒田刑事、三田刑事の顔も見えた。

「一体何が有ったんだ?・・・」と思いながら、デジタル画面を河口水面に移すと、そこには清楚な身なりをした中年らしき男性が浮遊ゴミのたまり場となるコーナー水面に、仰向けになって浮いていた。

城島の携带着信音がしたのはその時であつた。掛けてきたのは白石で「非番でお休みのところ申し訳ありませんが、管内で殺人事件と思われる事案が発生しました」と報告した。

城島は「わかつた、近くに居るのでこれからすぐ行く」と白石に伝えた。白石は「どうして場所が判つたんだろ？・・・」と思ひながらも城島の到着を待つた。

一方、城島はデジタルパノラマ望遠鏡を代わつてくれた男の子に「ありがとう、おじさんこれから事件の捜査に行くから・・・」とコインを追加してから握手をして礼を云い、男の子が「刑事のおじさん頑張つて」と云つてくれるのを背にして、88階のイタリアンレストランに急ぎ戻り「すまん、すまん、事件が発生したのであと頼む！」と絹代に言い残し、啞然とする妻を残したまもすぐに高速エレベーターに飛び乗り事件現場に向かつた。

城島のこうした行動には慣れつこの絹代であつたが「・・・もう・・・知らない！・・・」と思わず独り言を云つてしまつていた。

・続きは次回の更新までお待ちください。

( 1 )

[戻る top](#)

[戻る \( index \)](#)

[戻る \( sub0021 \)](#)

城島の動きはとにかく速かった。森慶スカイビュービル前で客待ちをしていたタクシーに乗り、隅田川河口にある豊海運動公園の事件現場に駆けつけたのは白石警部補から連絡して貰った約8分後であった。

キープアウトのテープ張り現場を監視する警官に白い手袋を貰い、白石達の待つ現場へ手袋をはめながら駆けつけた。これには白石達も驚きを隠せなかった。

「どこに居たのですか？場所がどうして分かったのですか？」と白石達は城島に尋ねたが、城島は「近くだ！」とだけ答え先程望遠鏡で見た浮遊する中年男性らしき物体を確かめるべくたまり場コーナー水面に接近した。そこには仰向きで腹部が妙に膨れた誰が見ても人間の死体と思われるものが浮かんでいた。

城島は早速「水面に浮かんだこの状態で写真を撮ってくれ」とすでに到着している鑑識班に指示した。同時に作業班に指示して「撮影が済んだら仏を引き上げてくれ」と頼み、作業班がシートで傷がつかないように包み、持ち込んだ二本のベルトを使用して、クレーン車で慎重に岸壁の空地に引き上げた。

早速鑑識班の現場での検視作業が始まり、そこに石原検視官も駆けつけ検視を開始した。鑑識班は状況を撮影するなどの調査と証拠を収集し、石原検視官はとりあえずの検視結果を「腹部がすでにガスで膨満し、生体反応もなく死後3日は過ぎていると思われる、体に刃物の刺し傷が多数視られ水死ではない」と城島達に報告した。

城島は詳しく調べるため、鑑識本部の室田監察医務官に遺体解剖検死を依頼するため、警視庁鑑識本部に遺体を収容することにし、一方鑑識班には、霞が関PP署に押収証拠品を持ちかえり、本部鑑識課の猪熊警部らの協力を求めるよう指示した。

城島達は「しばらくの間、現場付近の保存のためキープアウトを続けてくれ」と監視警官に頼み、一旦、所轄の霞が関PP署捜査14課に戻ることにし黒田刑事の運転するパトカーと三田刑事の運転するパトカーに白石と分乗して、帰署した時はすでに午後3時を少しまわっていた。

城島達は上野捜査課長と相談し、とりあえず「隅田川河口殺人事件捜査本部」を設置することにした。

午後4時、早速城島達は白石、黒田、三田及び新人刑事の古田と鑑識班の谷口を加え捜査会議を開き、其々の役割を決めることと、死体の身元確認をするべく打ち合わせを開始した。

会議が20分ほど経過したところへ、城島の酒友でもある本部鑑識課の猪熊警部が「先程連絡を貰い、本部の室田監察医務官のところに寄ってきて検死解剖結果の一部を貰ってきたよ」と駆け込んできた。

城島は「忙しい中をすまん、お前もこの事件捜査に参加してくれるな!」と強く呼びかけた。

猪熊は「何時もの事だ、俺で良ければ協力は惜しまん」と城島に押し切られる振りをして内心快く引受けていた。



リーダーの城島が「来てすぐで悪いが、猪熊の話聞かせてくれ」と云いかけたとき、捜査14課に外部から電話が入った。女性刑事の三田が電話に出ると、電話の主は先程城島が現場保存を依頼したキープアウト監視中の警官で、急きこんだ様子を抑えるように「大変です、先程の場所と近い河口の水面にもう一人の水死体と思われる遺体が浮かびました」と報告してきたのである。

城島達、猪熊も含めて7名は「すぐ、もう一度現場へ行こう」と緊急配備をして、パトカー4台に分乗し、赤灯、サイレンをつけ先程の現場に向かった。

現場はすでに午後6時を過ぎており、5月の後半では有ったがうす暗くなっており、駆けつけた時にはサーチライトなくして詳細を観察することは困難であったが、駆けつけた鑑識班が強力な光源を持ってきたので、水面を充分明るく照射することが出来た。

水面を観察すると、人が垂直に立ったように頭を水面に出している状態で有ることが見えた。城島は鑑識班の谷口に「撮影できるか?」と尋ね、谷口は「出来ると思いますのでやってみます」と答え、猪熊も「照度計では充分だから、光源を多少広域にして撮影する方が良いよ」と鑑識らしい打ち合わせをしながら撮影した。

撮影後、別に到着していた鑑識班の潜水チーム3名が水中に潜りながら、調査を開始したところ「被害者の足にロープとアンカーの様なものを取り付けられています」と大声で報告した。

猪熊は「水中カメラが使用できるか?」と潜水チームに聴こえるよう大声で質問した。

潜水チームは「問題なく可能です!今から撮影します」と伝えた。

猪熊は「仏さんの4方向から撮影してくれ」とアドバイスして、自分も水中にはまる様な恰好をして覗き込んだ。

撮影終了後、潜水チームは水中をくまなく調べ、ロープやアンカ様の証拠品を押収した。

しばらくして到着したクレーン車で、昼間と同じく二本のベルトを使い、遺体に傷がつかないよう慎重に引き上げ、岸壁空地で駆けつけた石原検視官により、検視が行われた。城島はこの遺体も上品なスーツを着用した高齢者に近い男性であると感じていた。

石原検視官は「遺体は60歳くらいの男性で、死因は絞殺で水死ではなく、死後15時間から18時間経過している。また、遺体の爪には犯人のものと推察される抵抗傷細胞が付着している」と概略の検死結果を城島達に報告した。

城島は「この遺体もすぐに鑑識本部の室田監察医務官にお願いし、解剖検死をお願いしてくれ」と白石警部補に依頼し、調査が終わるまで立ち会ってくるよう指示した。

白石は鑑識班の谷口とともに、パトカーに遺体をシートで包み乗せ、鑑識本部の室田監察医務官に届けるために現場を離れた。

城島と猪熊をはじめ黒田、三田および新人刑事の古田はあたりを詳細綿密に調査したが目新しいものは見つからなかったので、明日にも鑑識班全員で再度調査することにして、再び所轄の霞が関PP署に戻ることにした。すでに時刻は午後9時を過ぎていた。

二人もが同じ場所で殺害又は発見されるという事件の異常さを考

慮して、この事件を「隅田川河口連続殺人事件捜査本部」として、捜査をすることに決定した。

身元を確認できる所有物もなく、鑑識の調査等を確認するには明日早朝までかかることが分かり、これ以上の推論は無意味と感じた城島は「明日早朝の捜査会議を午前8時から行うこととし、それまでに各捜査員は事件と関連する考察をしておくこと」と指示し、白石達とも連絡を取り、また事件現場でキープアウト監視を続ける警察官にも連絡し交代要員の確保をお願いし、気持ちを一新してかかれるよう考慮して、当日の捜査を終了することにした。

城島がこのような判断を下す場合、長年の友猪熊は熟知しており「城島は殺人はこれで終わらないと考えているな・・・」と呟いた。

この日は資料不足で捜査会議が出来ず、明日まで待とうということになったが、さすがに猪熊と一緒に酒を飲もうとは出来ず、城島は皆と所轄署の前で別れ家に直行した。

城島は家に着いて、妻の絹代が昼間の騒ぎについて多少なりとも不満を持っていることを完全無視して謝りもせず、宙を見るような態度で妻の絹代が差し出す食事を黙って食べ、風呂に入っすぐにベッドに横たわり今日の出来事を考えなかなか寝付くことが出来なかった。それでも絹代は刑事の妻として大変寛容な人物で主人城島を気遣って静かに城島の眠りを待った。

城島は朝寝坊である、午前6時半「起きなさい。今日は朝早いんでしょ」と絹代の大声でたたき起こされ、顔を洗うのも早々にみそ汁とアジの開きを具にした朝食をかきこみ所轄署に到着したのは午前7時50分頃で、捜査会議にもう少しで遅れ面目をなくすところであった。

我が捜査員の面々は極めてまじめ、律義ですでに全員着席していた。「すまんな、俺が遅れたら懲戒もんだ」と言い訳をしながら皆の正面に着席し、ほどなく猪熊もそろったので捜査会議の開催を宣言しようとした刹那である。

今度は110番中央管制室から、竹芝護岸に女性死体が漂着したとの緊急出動依頼が舞い込んだのである。

一同、顔を見合わせ、再び緊急出動を余儀なくされ、捜査会議どころでなくなり、捜査員達はすぐ現場に駆けつけるはめになった。

・続きは次回の更新をお待ち下さい。

(2)

戻るtop

戻る(index)

戻る(sub0021)

更新日：2010・06・03

## 第二章

### 多発する殺人事件

城島警部達の所属する霞が関PP署は、北は永田町、丸の内、赤

坂、東は銀座、築地、晴海ふ頭、南は芝浦、田町、天現寺、西は青山、迎賓館、広尾地区を四角い枠で結ぶ範囲にある、各地区の警察署を広域にまとめる役割を持ち、従ってその捜査活動の範囲は極めて広いものになっている。

そのため、110番中央管制室から連絡を受けた竹芝護岸の女性死体漂着についても緊急出動が要請されたものである。

城島達は、赤灯、サイレンをつけた4台のパトカーに分乗して、約10分で現場の竹芝護岸に到着した。そこには既に地区警察署から出動した警察官が立ち入りを規制していた。

地区の警察官が敬礼して迎える中、捜査員達は小走りに現場の護岸に到着し、水面に浮かぶ女性らしき服装をした遺体を見た。

まもなく応援の鑑識班6名が昨日と同様にクレン車、作業車で駆けつけてきた。

早速本部鑑識課の猪熊警部の陣頭指揮で現状写真撮影、遺留品押収、海底捜査が実施され、女性遺体は護岸に引き上げられ、城島達及び石原検視官の代わりで佐藤検視官のもと、検死が実施された。

佐藤検視官によると「推定50歳前後の女性、死因は頸動脈の切断が致命傷で、不思議なことに殺害時抵抗した様子はなく、死後20時間は経過している」との判断で有った。

城島は女性の死に違和感を感じていたが「白石、またですまんがこの仏も鑑識本部の室田監察医務官のもとに移し、検死解剖して貰ってくれ」と頼み、白石と黒田に本部に向かわせることにした。

白石と黒田が現場から離れようとした時、城島は不思議な殺気を感じ、ふと、汐留方向の四季劇場に目を向けたところ、市道から双眼鏡でこちらを見る不審な人物の姿を見た。

背丈はおよそ170センチを超え、細身の男性で身なりは清楚なスーツを着こなしており、その胸には金色のバッチの様なものをつけているように見えた。

城島がその人物を良く見ようとして「オイ、誰か双眼鏡を持っていないか？」と後ろをふり向いて尋ね、振り返るとその男性は黒塗りのセダン後部に乗り込み、そこから汐留JCT方面に立ち去って行くのが見え、なぜか城島はあと後までこのことが気になるのであった。

現場での捜査では、遺体から遺留品らしきものは採集することは出来ず、身元の確認も出来なかったが、城島は「どこかで見た事のあるような仏さんだな？」と思っていた。

そこに猪熊も「オイ、城島、あの仏どこかで見たことなかったか？」と自分が感じたことと同じことを云ったので驚き、思い出そうと努力したがその時は出来なかった。

ある程度の現場捜査を終え、所轄に戻ろうとする城島達にパトカーの無線連絡が入った。無線は港区芝公園内で変死体発見との内容で、近くに居た城島達に調査指示が発せられた。

芝公園までは約8〜10分の距離である。竹芝の現場から赤灯、サイレンを鳴らし国道409を通り、芝公園にはあつという間に到着した。芝公園にはまだ地区の警察署からの警察官は到着しておらず、城島達の方が早く到着した。

辺りは、多数のやじ馬で埋め尽くされ、通報者を探すのに至難の苦勞をした。やっと見つけた通報者は公園内で寝泊まりする72歳のホームレス老人で、昨夜から寝ているように見えたと変死者の方を指さしながら説明した。

丁度、竹芝護岸の捜査に立ち会った佐藤検視官も同行していたので、城島は「死因は？調査して下さい」と依頼するとともに、自分も変死者の観察を続けた。

佐藤検視官は「直接の死因は腹部に撃ち込まれた銃弾による内臓破裂で、推定50歳前半の男性、死後7時間程度です」と見解を城島に伝えた。

城島がまわりを観察したところでは、昨日から続いている事件と錯覚するような、清楚、上品に着用したスーツ姿の男性遺体で、身元を特定するような遺留品は無かった。

城島は昨日から続いている事件がなぜか同一の様な気がしてならず、猪熊に「これは同一犯による連続殺人事件ではないのか？」と意見を求め、とりあえず鑑識本部の室田監察医務官に検死解剖を依頼することにした。

その他の捜査を三田刑事、新人刑事古田、鑑識班の谷口が主体となつて行う間、城島と猪熊は昨日から4件にわたる近隣での殺人事件をどう思っかなどを話しあっていた時、やじ馬に埋もれるようにして事件を見る、竹芝の事件現場に現れた人物がいることに気付いた。

城島は気付かれないようにその人物に近寄り、あと数メートルと

云うところで、やじ馬の人垣に遮られ、職務質問出来ず、その人物は姿を消した。しかし城島の脳裏にはその謎の人物の身なり、顔面特徴等の捜査情報は充分叩きこまれていた。

その後現場捜査を終えた捜査員達は昼前に霞が関PP署に全員戻り、署内の食堂で昼食を済ませた後、朝始める事が出来なかった捜査会議を開始することにした。

捜査会議の前提に城島は「今後この捜査会議中に同じような緊急出勤要請があっても、捜査14課の他の捜査員に出勤協力をしてもらうよう上野課長にお願いしてあるので安心してくれ」と全員に気配りした。

同時に城島は「今日の朝、猪熊の話を聞こうとしたところで事件現場に行ってしまったので、最初猪熊警部から話を聞こう」と猪熊に促した。

それではと云って猪熊は「鑑識本部の室田監察医務官のところでは、最初の男性遺体の検死解剖の結果が出ていたので、それを預かってきたから説明します」と前置きし、実は「死亡原因は両刃の刃渡り20センチのナイフで、脇腹を刺された出血性ショックであり、推定年齢は67〜70歳の男性、右手中指に大きいペンダコがあるので、年齢から考慮すると現役とは思えないのでサラリーマンではなく、文筆活動家のように思われるとし、死亡時間は腹部のガスの具合から、3日前で、消化の具合から昼直前に殺害されたものと考えられる」との見解で、また「水は飲んでいないので、死後隅田川に流されたものである」と説明が有った旨報告した。

猪熊の説明が終わるのに合わせて鑑識本部の室田監察医務官に立ち会った白石警部補が「第二番目の男性遺体は、推定65歳で、死



亡原因は絞殺によるもので、死亡推定時間は約12時間前で有り、水死ではなく別のところで殺害され、隅田川にロープで縛られアンカーをとりつけられた上投げ込まれたもので、特に絞殺される前に格闘し被害者の爪からは抵抗したさいに生じた犯人の皮膚組織が採取出来ている」また「最初の被害者と同じく右手中指に大きなペンダコがあり、文筆活動家の様に思われる」と説明された旨報告した。

白石は続けて「第三番目の被害者は女性であり、現在、室田監察医務官が検死解剖中ですが、この遺体の右手中指にも大変大きなペンダコがあったのを自分の目で確かめてきました」と一連の事件で共通する点を、捜査の基本通りとして強調した。

城島は「では第四番目の被害者はどうなんだ？ペンダコはあるのか？」と全員を見渡すように尋ねた。

すると突然猪熊が立ちあがり「すまない、すぐ調べるので席を外す」と云って、部屋の片隅に行き本部鑑識課の森野に連絡を入れ「室田監察医務官の所へ行って、腹を拳銃で撃たれた害者の遺体を視て、右手左手は構わないからペンダコが有るか視てきてほしい」と依頼した。

猪熊の依頼を確認した森野からはすぐに返事が来て「猪熊さん、遺体には左手中指に硬く大きいペンダコがありました」と教えてくれた。

すぐ席に戻った猪熊は「第四の被害者も硬く大きなペンダコがあった」と全員に報告した。

今日の捜査段階では判らない身元の不明な四件の殺人事件に共通する最初の情報はペンダコであり、被害者は共通して、文筆活動家

ではないかと連想された。

しかしペンダゴは程度に差があるにしても誰でも少しは有るものであり、ペンダゴがあるからと云って文筆家と特定することにはかなりの無理がある。

ただ、今の時点では有力な考慮すべき検証結果であった。

城島はいつもの癖で、突然話を割り「ところで皆、各被害者の顔を見て・・・どこかで見たように思わないか？」と全員に尋ねた。

城島の質問に皆だんまりを決め込み応答できない時間が数分流れたとき、新人刑事の古田が突然「第一番目の被害者はTVでよく見る辛口コメンテータのノンフィクション作家の望月宏によく似ていませんか？そっくりだと思つのですが」とフレッシュマンらしく思いつくまま答えた。

古田の話聞いた女性刑事の三田は触発されたように「第二番目の被害者は新聞、雑誌でよくノンフィクション記事を書いている墨田啓介に似ていませんか？」と云った。

続けて三田はそう云えば「第三番目の被害者は三年前、役所を退職し、各省庁の問題を暴露している当時のノンキャリア組の福本百合子さんにとてもよく似ていると思います」と確信的な表情をして述べた。

第四の被害者についてはまだ写真が出来ていなかったためと思われるが、皆からの憶測を交えた感想は出なかった。

城島と猪熊は各事件の被害者を見て「どこかで見たことが有るよ

うな……」とお互いに思っていたことを思い出し、皆の言葉に説得力があるなあと感心して聞いていた。

その時、城島は事件現場に二度も現れた不審な男性の事を思い出し「この会議が終わった後、似顔絵作成班でイメージを画像にしてもらい皆に見せよう」と考えていた。

時刻を見ると既に午後五時前になっていた。「今日はこれまでにして、鑑識本部の室田監察医務官の検死結果や鑑識班の収集物の調査結果を待つて明日捜査会議を再開する」と城島が皆に会議終了を伝えた。

白石以下全員に「明日から忙しくなるぞ、心して捜査準備をしてくるように」と気を引き締めさせ、今日は早く休めと指示し、解散させた。

会議を解散した後、変に猪熊が「お前これからどこへ行くんだ？」と付きまとうように城島に話しかけ、ついに猪熊と一緒に霞が関P署の六階にある似顔絵作成班に行くことになった。

城島を迎えたのは、似顔絵をいかにも描きそうな若くて「かわゆい」女性警官であった。城島は警察署内であるにもかかわらず、いたずら心も出て「おえかきをしてほしいのでちゅー！」と気持ちの悪い声を出して手を揉んでお願いした。これには猪熊はバケツをひっくり返したように吃驚して声を出すのさえたためらい、年甲斐もなく顔を真っ赤に赤らめた。

女性警官は驚きもせず「警部が見たのはこのようなイメージですか？」とはつきりした質問を繰り返し、一時間もすると手際良く城島のイメージを正確に描き出していた。

それを見た城島は女性警官にまじめに敬礼をして「ありがとうございます。おかげさまで明日からの捜査に役立ちます」と真剣に礼を云った。

城島は猪熊に「この男が事件と関係するに違いないと思っている」と云いながら、描いてもらった画像を見せた。

猪熊はその時、似顔絵で描かれた男を判断することは出来なかったが、城島と近くの居酒屋で別れた後、家に帰り午後9時から始まる「今日の出来事」と云うTV番組のニュースを見ていた中で、その男の正体を知ることになるのである。

・続きは次回の更新をお待ち下さい。

(3)

[戻るtop](#)

[戻る\(index\)](#)

[戻る\(sub0021\)](#)

更新日：2010・06・04

### 第三章

#### 被害者と謎の人物

その頃の日本社会は、時の総理大臣（小野天昇）と民間から入閣

した財務特命大臣（竹田平太）がリードし「改革だ、改革だ」の号令の下に、最悪とも思われる格差社会を作り上げてきた時代で、彼らの先輩が作り上げた「一億総ハト小屋住まいの中流意識」政策をさらに落としめた暗い世の中を構成させていた。

その結果、巷では考えもつかない様な犯罪が増え、中には、日本の脆弱な証券取引所のスキを突いて錬金術のように紙切れを株券にして、相場を操り、政界、TV等のマスコミ界で時代の寵児と云われ「金至上主義」を平然と語る妖怪じみた若者さえ生んでしまっていた。

世の中のそうした風を感じない公務員世界にあっても、刑事という職業にある城島達は敏感に巷から教えられており、中でも特に正義感の強い熱血漢の城島は強く矛盾を思う一人であった。

最初の事件から三日目の朝、隅田川河口連続殺人事件捜査本部の捜査会議は午前8時から城島と猪熊、白石を正面席にして、これに対面する形で、黒田、三田、古田の各刑事と鑑識班の谷口以下4名が席に着き開始した。

冒頭、城島は「皆が知っている通り、被害者は全て中年から高齢者でありペンダコが有ることは承知しているが、それよりその身なりが一般の人と比較すると清楚かつ上品な事で共通している事についてどう思うか」と切り出した。

鑑識班谷口は「そうです、3件の男性被害者の場合、高齢者がいて、すでに5月を過ぎようとしているのに、全ての被害者はネクタイをし、清楚かつ上品なスーツを着用していました。」また「1件の女性被害者においても上品なビジネススーツを着用しており、どうも一般的な被害者ではないように思いますが・・・」と少し自信

の無いような答え方をした。

その時、三田と古田が同時に発言しかけ、結局先輩の三田が先になり、「一般の人と服装が相違するのは、やはり被害者達は所謂有名人に近い人達ではないでしょうか？」と意見を出し、新人刑事の古田も同意見と頷いた。

続いて三田は「今朝早く4件目の事件被害者の本部鑑識課で撮影した遺体写真と事件現場での遺体写真を見ましたが、この男性は小熊大学教授で政治ジャーナリストの金子俊夫さんではないかと思えます」と写真と金子教授が載っている雑誌を差し出した。

今度は、黙って聞いていた城島と猪熊が口をそろえて「では、第一事件の被害者は望月宏、第二事件の被害者は墨田啓介、第三事件の被害者は福本百合子、第四事件の被害者は金子俊夫と云う事か？」と城島、猪熊とも「どこかで見たことのある被害者・・・？」と云う昨日の直感から肯定的に三田と古田に尋ねた。

三田と古田は「はい間違いないと思います。それと彼らにはペンダコが有ります。」と自信を持って答えた。

城島は「それではこの後早急に彼らの安否確認をしてくれ、それと指紋、DNA鑑定用に髪の毛、指紋付着物などが無いか各家を訪問して採取してくれ」と捜査員全員に指示した。

望月家には黒田と鑑識班の谷口、墨田家には三田と鑑識班の久保、福本家には新人刑事の古田と猪熊警部、金子家には白石警部補と鑑識班横田を組み合わせ捜査に向かうこととした。

取り急ぎの捜査手順として被害者の確認を急ぐこととし、捜査会

議を終了しかけたが忘れ物をしたように城島は「今でなくてよいから、この人物について心あたりが無いか考えておいてくれ」と昨日似顔絵作成班が提供してくれたイメージ画像のコピーを全員に配布した。

ああ、そうだったと猪熊が「昨日お前と別れ家に戻り、久しぶりのTVニュースを見ていた時、内閣官房庁補佐官で衆議院議員の車屋・・・とかと良く似ているように思ったんだが・・・」と城島に報告した。

城島はハツとした目をして「そうだ！どこかでみたことがあると思っていたんだが、灯台下暗しとはこのことか」と気付いた。

そうしたやり取りの後、各捜査員は二人一組になって一斉に想定被害者宅へ安否確認と捜査に向かった。

捜査本部に一人残った城島は「官房補佐官がなぜ事件現場に二度も顔を覗かせていたのか？」と不思議そうに考え込んでいた。

また「彼は別の事件にも現場を窺うようなそぶりをして来ていた。やはり事件と何か関係があるのではないか？」と城島は深く可能性を考えた。

とにかく人違いであっては困るので、捜査課の上野課長に事情を話し、上部組織と相談し事実確認をもらうことにした。上野課長はやりにくそうではあったがなんとか引受けてくれた。

時間がたつのは早く既に捜査員が全員出発してから2時間が経過し、時刻は昼12時を回っていた。其処へ捜査本部の館内スピーカーがなった。

スपीカーからは新たな殺人事件発生との通報で、上野課長の約束通り捜査14課の他の捜査員が緊急出勤していくのを、隅田川河口連続殺人事件捜査本部の窓越しに眺めていた。

午後1時過ぎ、捜査に出っていた4組の捜査員は次々に城島の待つ捜査本部に戻ってきた。各捜査員とも我先にと報告を焦るようにしたが、城島は「まあ待て、飯でも食った後にせんか」と宥め、皆を集めて署の前にある回転寿司店に案内し、先ず労をねぎらった。

午後2時、捜査会議を再開、

望月家に出向いた黒田、谷口組からは「4日前から出張になると家人に言い残し、何時帰るともいわず出かけたまま連絡は無い」と報告し、また「書斎の一部から指紋が付着していると思われるカッブと毛髪を3本採取してきました」と報告が有った。

墨田家に出向いた三田、久保組からは「2日前からTV収録の打ち合わせに行くと行って出かけ、毎度のことながら行方が判らないのです」と家人の話を報告し「仕事場と家人が云う場所で、使用中と思われるペンと歯ブラシを採取してきました」と報告した。

福本家に出向いた古田と猪熊組は「3日前から雑誌社の記者と取材に行く和家人に告げ出かけたが今日になっても連絡が無く、心当たりで連絡しているところだ」と報告が有りまた「仕事部屋のハンガーから指紋の痕跡が見られたので採集し、整髪用ブラシに彼女の毛髪が付いていたのでブラシごと預かってきた」と猪熊らしい機転を披露した。

金子家に出向いた白石、横田組は「一昨日の昼過ぎ大学を出たま



ま家に戻らないので心配していますと奥さんが言っていました」と報告しました。「玄関にあった靴べらと浴室で整髪に使用している髪の毛の付着したブラシを採取して来ました」とそつなく報告した。

報告を受けていた城島は「ご苦労さん、随分早く焦点が絞れそうになって有りがたい。では、先ず指紋照合を鑑識班で至急開始してもらおう」とし、「採集した毛髪に関するものは本部鑑識課に依頼してDNA鑑定を出来るだけ早くして貰うよう猪熊警部にお問い合わせ」と速やかに指示した。

尚と城島は続け「各被害者と思われる宅へ出向いた捜査の組は、其々の相手をパソコンその他でプロフィール等の調査を実施し、情報を纏めてくれ」と要求した。

各捜査員はすぐさま其々の作業に取り掛かり、事件の整理と情報の収集を開始した。

城島達がそのような調査作業をしていたところ、捜査14課の上野課長が顔を見せ、城島に「話があるので俺の部屋に来い」と命じた。

城島が上の階の課長室に出向くと上野は少し困ったような表情を見せながら「今日の昼にお前に頼まれた件で、警視庁官房から内閣官房に連絡してもらい俺が出て、補佐官で衆議院議員の車屋喜久治氏の昨日の行動を聞くとしたのだが、公開できないの一点張りです話にもならん」と詫びるようなしぐさをしながら城島に要点を伝えた。

上野課長は「また別の方法を考えてみるから、全員の士気が低下しないよう頑張ってくれ」と云ってくれた。

城島は難しさを嫌と云うほどに熟知しているので「ありがとう」  
ざいます」と丁寧な礼を述べ捜査本部に戻った。

捜査本部の今日の仕事が終わりがけようとしていたところに、城  
島たちの代わりとして昼過ぎに緊急出動した捜査14課の他の捜査  
員が戻り「事件は都立青山公園内で、二人の若い男性が特殊な銃で  
撃たれ、即死していたもので、被害者の二人は客引きをなりわりと  
するその業界では顔見知りの多いチンピラでした」と城島に耳打ち  
をしてくれた。

城島はその捜査員に「すまなかった、御苦労さま」とねぎらう事  
を忘れなかった。

事件はこの後、この若者二人の死とともにさらに進んで行くとは  
誰も推定することができなかった。

・続きは次回の更新をお待ち下さい。

(4)

[戻る top](#)

[戻る \(index\)](#)

[戻る \(sub0021\)](#)

更新日：2010・06・06

城島達の代わりに捜査に応援出動してきたした、捜査14課の他

の捜査員が都立青山公園内の若者二人の殺人事件を上野課長に報告した結果、関連は少ないか？と思いつつも「城島、先の事件とは被害者の年齢、予測される職業などから考えて関連性が低いかもしれないが、管内でこれ程多数の殺人事件が数日の間に起こることは普通ではないので、お前の隅田川河口連続殺人事件捜査本部の捜査対象に加えてはどうか？」と城島に相談し、同時に「捜査対象件数が多いので、課内の捜査員をあと3名お前に預ける」と云ってくれた。

応援をしてくれる捜査員は駒田刑事、沖本刑事、中家刑事で、早速三人は城島のところに来て、今までの捜査経緯を白石警部補から説明を受けた。

こうして隅田川河口連続殺人事件捜査本部は、城島を含め総勢8名の捜査員と捜査14課の鑑識班谷口、横田、本部鑑識課の猪熊をいれた計11人で取り組むことになった。

そうした中、捜査14課の鑑識班から「まだDNA鑑定結果は出ておりませんが、被害者の指紋と捜査員の採取した指紋は全部一致しました」と城島に報告した。

また、プロフィールを検索していた各捜査員から、検索結果を示された城島は直ちに「新しく3名が応援に参加してくれたので、今から捜査会議を実施する」と全員を呼び集め、夕刻ではあったが構わず会議を行うことにした。

城島は若者二人の遺体詳細は今、鑑識本部の室田監察医務官のところで調査中でまだ報告はないがと前置きして「4件の被害者が判明した。については各被害者の人となり、つまりプロフィールを白板に示してくれ」と調査した捜査員に指示した。

先ず一番目の被害者、望月宏を調査した黒田刑事は「望月宏69歳、杉並区在住、TVコメンテーターを主たる職業とする外多数の政治に関するノンフィクション著書あり、米国ユータリー大学卒」と概略を述べるとともに顔写真を貼り付けて白板に丁寧に記した。

次に二番目の被害者、墨田啓介を調査した三田刑事は「墨田啓介65歳、渋谷区在住、職業はジャーナリストで独特のタッチでならすノンフィクション記事を新聞、雑誌に提供している。その他外国特派員としても活躍するよく知られた人物、森京大学政治経済学部卒、米国パールトン大学研究留学経験あり」と顔写真を貼り付けて記した。

次いで三番目の被害者、福本百合子を調査した新人刑事の古田は「福本百合子56歳、葛飾区在住、各省庁批判で知られる公務員出身の著作業、奥山大学教養学部卒」とすばやく顔写真を貼り付けて記した。

最後に四番目の被害者、金子俊夫を調査した鑑識班の横田は「金子俊夫59歳、千葉県在住、政治ジャーナリストで小熊大学教授、政治著書多数」と説明しながら顔写真を貼り付けて記した。

城島は念のためとして、5番目の被害者の若者二人について「調査は今行っているところで氏名など不詳であるが、年齢は20前後との事であり、採取された弾の線条痕から旧ソビエト製のトカレフ3065-32口径という特殊な改造拳銃で至近距離から射殺された模様で、一人はなぜか顔が傷だらけだった」として、二枚の遺体写真を貼り付けながら説明を加えた。

其処へ鑑識本部の室田監察医務官からの専用秘密保持ISDN回線によるデータ送信が城島の手元に届いた。

会議の途中であったが、城島は内容を見た。そこには、1から4件のDNA鑑定を含む全部の遺体解剖結果所見と、5件目の若者二人のDNA鑑定を含む概略速報所見が記載され、多数の傷がついた遺体の表面、内部等の状況を示す写真などが添付されていた。

1から4件の遺体については概ね城島たちの捜査と一致をみただけで、遺体の身元、年齢及び殺害の手口は確定したが、若者二人については殺害手口については旧式（旧ソビエト時代）の改造拳銃の使用と被害者が20歳前後であること以外身元は依然不詳であった。

捜査会議は1から4の事件被害者の共通点として、執筆などの文筆活動家であることを確認し、加えて城島は「なぜ、彼らは殺されたのか？・・・犯人にはどんな利益があるのか？」と捜査員の全員に考えてくるよう指示した。

「記者が待っているので、今日の捜査会議はこれまでとする」と城島が云ったのは午後の7時半ごろで、城島と猪熊、白石はその足で急ぎ会見場に向かった。

新聞、TVの記者達は随分待たされたことをブツブツ云いながらも、何とか記事のアップ時間に合ったようので、早速「連続殺人ですか？」、「犯人の目的は？」、「犯人の目星は付いたのか？」など性急な結論を求める質問がやつき早に飛び出した。

城島は「まだ分らない、しかし被害者は貴方達の馴染みのある人達と、未だ身元も分らない若者二人です」と分った範囲で正確に答えた。

この内容を知るや記者たちは一斉に会見場を飛び出し、早番の記

事に間に合うよう又ニュース速報番組に間に合うよう走り出した。

各局TVでのニュース速報では会見後20分で、城島達の会見の様子がなされ、朝刊に「連続殺人鬼現る」の大見出しが踊ったのは云うまでもない。

会見の翌朝、捜査本部に「うちの子供ではないか?」、「うちの店に勤める子ではないか?」等、殺害された二人の若者の関係者と名乗る人から20件ほどの問い合わせがあったが、捜査員達は「未だ調査中で分らない部分があるので」と問い合わせ内容の簡単な調書をメモするようにした。

一方、城島は収まるかどうか分らない今回の連続殺人事件について「もしも、若い二人がこの件に関連しているとすれば、先の1から4番目の知識人とも思える高齢者の連続殺人事件と、全く雰囲気の違い若し二人の事件はどこで繋がるのだろうか?」と自問自答していた。

根っからの行動派でもある城島はいかにもエネルギーギッシュに見える新人刑事の古田と繊細なところを見せる三田刑事に「どんなことがあっても被害者、若者二人の身元を見出せ」と特に命じた。

やる気満々に見えた三田と古田の二人が互いに顔を見合わせて頷くように、最初に向かったのは捜査本部と全国の警察署を結ぶパソコンの前であった。

これを見た城島は「やつらは何をする気だ?」とそばにいた猪熊に、いかにもハイテク音痴を自認するように不思議そうな顔をして尋ねた。

猪熊は城島に気配りを見せ「やつら、・・・ウン、犯罪歴にないかを調べるのではないか!?」、「昨日、遺体の指紋は手元にあるだろう?」と城島にそれとなく教えた。

城島は「あつ! そうか、そうか」と気が付いたように答え、自分達のしてきた足で歩き真相に近づくのが最初とする捜査手法の変遷に少々不満げな顔を見せた。

が、しかし、この勝負、見事に城島の完敗であった。

一方、猪熊は気になることが生じたのか本部鑑識課の森野に連絡し「室田監察医務官にお願いして、腹を撃たれた小熊大学教授の金子俊夫の死因になった銃の種類はどうか? 少し荒っぽいかもしれませんが、5番目の事件被害者の若い二人を殺害した拳銃の銃創傷と違うのか?」を調べて返事してほしいと伝えた。

森野は「よく分かりました。室田監察医務官に尋ねますので少し時間をください」と猪熊の鑑識としての勘を信じた答えを返した。

猪熊の森野への指示を聞いていた城島は刺激されたように「俺は今から被害者の知識人がどんな活動をしていたか巷を歩いて調べてくる。お前も一緒に行くか?」と半ば鑑識の知恵を借りるべく、頼み込むような言い方で猪熊を誘った。

白石を筆頭とする手の空いた残りの捜査員達には、白石を捜査本部に城島の留守居役として残し、黒田と鑑識班の谷口、横田を三田と古田の手伝いをさせ、城島と猪熊は新しく参入してくれた駒田刑事、沖本刑事、中家刑事を同行して町に出た。

先ず、城島が特有の勘を働かせ「オイ皆、これから本屋に行つて

みないか？殺害された知識人なら執筆した本や雑誌があるはずだ。彼らの実体を知るにはそれが一番のように思う」と云って、駒田刑事の運転するワゴン車に全員が搭乗してランダムに本屋巡りを開始した。

猪熊は「先ず霞が関周辺の本屋、楊貴妃で売れ筋の中に1から4件の事件被害者の書いたものがないか、あれば内容はどうか？汐留辺りのダウンタウンにある本屋、雲割屋書店で同じようにしてみてもどうか」と提案した。

城島は猪熊の提案を「猪熊らしく、よく読まれているものか又地域に差はないか」を調べるつもりだと充分理解して「そうしよう」と同意して皆に合図した。

本屋「楊貴妃」には約5分で到着した。

一同店内に入ろうとした時城島の携帯電話が鳴り城島が出ると「若者二人の身元などが分かりました！」と興奮気味に話す新人刑事の古田からであった。

「でかした！どうして分ったのか？」と城島が尋ねると、古田は「パソコンで前歴者の指紋と殺された二人の指紋を照合したのです。一人は電気店での万引き、もう一人は飲食料金踏み倒しと公務執行妨害で逮捕、起訴された経緯がありました」とそばにいる三田やその他の捜査員達に同意を求めている姿が浮かぶような言い方をして報告した。

「で、被害者の名前は？年齢は？職業は？」と城島が尋ねると、三田刑事が電話口に出て「警部がお持ちの遺体写真？は荒木孝三、年齢21歳、現在の職業は新宿にあるいかがわしいサービスを提供



するインターネットカフェ「光路」の客引き、写真？は木本新一、年齢23歳、現在の職業は同じく新宿にある競合店のインターネットカフェ「有線」のシステム担当兼客引きです」と手際よく伝えた。

城島は猪熊に「殺害された若者の身元が割れた、すまんが、お前が本屋の捜査を仕切ってくれ」といい、「上野課長から捜査費を貰ってきたから、これで捜査に役立つと思われる書籍が見つければ買って持ち帰ってくれ」と云って、5万円を猪熊に手渡し、2班に別れ、城島と中家刑事が一組になり、猪熊と駒田刑事、沖本刑事を一組として別行動をとることにした。

城島と中家はタクシーで新宿に向かった、車中「これからは俺も少しはパソコンを使いこなせるよう三田や古田に教わるよ」と反省を口にする城島であった。

・続きは次回の更新までお待ちください。

(5)

[戻るtop](#)

[戻る\(index\)](#)

[戻る\(sub0021\)](#)

更新日：2010・06・07

## 第四章

事件は繋がりはじめた

午前10時過ぎ、城島と中家は被害者若者の一人「荒木孝三、2

1歳」の勤務先、インターネットカフェ「光路」に着いた。

一方、書店巡りをしていた本部鑑識の猪熊、捜査14課の駒田、沖本らは霞が関近くの本屋、楊貴妃での調査を終わり、汐留にある雲割屋書店に向かいつつあった。

その車中の猪熊に「今、新宿のインターネットカフェ「光路」に着いた。これから中に入るんだが、昨日から気になっている事があってと前置きをしながら、第2の事件被害者、墨田啓介の爪に犯人のものと思われる皮膚組織があったのを覚えていると思うが、室田監察医務官はDNA鑑定をしてくれたのか？したとすれば一連の事件関係者と一致を視ることはなかったかなあ？念のため調べておいてくれんか」と城島がわざわざ電話してきた。

猪熊は「こういう時は、城島の勘が働き、今までも何かのきつかけになって来たなあ」と思い、「そうだ、そうだ」とひとり言を云いながら、本部鑑識の森野に頼んでおいた第4の事件被害者、小熊大学教授金子俊夫の銃創傷調査確認のことを思い出し、早速森野に連絡した。

森野は「はい私も丁度警部に連絡しようとしていたところで、室田監察医務官によると、第5の事件被害者若者二人の場合は、発射された弾が近くで鑑識により採取されたため、銃創傷の具合と鑑識からの弾の線条痕から判断して旧ソビエト製のトカレフ3065-32口径が使用されたと理解したが、第4の事件被害者、小熊大学教授金子俊夫の場合は、弾が発見されておらず、体の腹部を貫通しており、内臓が破裂しているので銃の特定が出来なかった」と云っておられましたと報告した。

猪熊は素早く判断して「判った、その件は弾を見つければいいん

だ、そうだ、捜査本部で留守を預かる白石警部補達に頼み調査を再開してもらうから、一度電話を切るよ」といい、すぐ白石に「捜査14課の鑑識班で第4の事件現場で凶弾の探査をしてくれんだろうか？」と事情を話して依頼した。

白石は「了解しました。すぐ行動します」として、丁度捜査本部にいた三田と古田を鑑識班と同行させ現場の再調査に向かわせた。

白石に再調査を依頼した後、猪熊は再び森野に「第2の事件被害者、墨田啓介の爪に犯人のものと思われる皮膚組織があったのを覚えていると思うが、室田監察医務官はDNA鑑定をしてくれたのか？」、また「そのDNAが一連の事件関係者と一致することはなかったか」と城島の云った通りの表現で尋ねた。

森野は「重要なことですね、すぐに室田監察医務官に確認を取ります。もしまだの場合には事情をお話して早急に実施して貰うように依頼してきます」と猪熊に伝えた。

その頃、城島と中家はインターネットカフェ「光路」に入り、はじめは客を装い手早く店内様子を観察した。店内はうす暗く新聞紙大の小さな窓が一個所あるだけで、ダウンライトを設置した個室タイプの狭いパソコン部屋が30箇所程あり、午前にもかかわらず10人ほどの利用者がいた。

カウンターには未成年と思われる女性が多数おり、いかつい顔をした城島達を訝るように「店長、お客ですよ」と奥の部屋に声をかけた。

中から出てきたのは虹色に髪を染め、鳥の鶏冠のように側頭部分のみを刈り上げたスタイルの、城島達には到底理解することが出来

ない頭をした20歳後半とみられる男性であった。

城島達は警察手帳を提示し、怯えるように驚く店長に「今日は風俗取締できたのではないから安心して答えてくれ」と早速、荒木孝三について「荒木はこの写真の人物に間違いないか？どんな仕事をしていたか？彼の事件は知っているか？ここでの生活で最近変わったことは無かったか？」等と殺害された荒木の状況を聞いた。

風俗の営業部分を見逃すと聞いて安心した店長は「事件は彼が休んでいることと、TV報道で顔写真が出ていたので、殺されたことは知っていた。またうちの給料ではとても考えられないほど最近急に金廻りが良くなった様子で、新橋のワンルームですがキャッシュで買い、仲間との遊興も派手になり、私に、近いうちもつと金が入るんだと言っていた」と説明した。

城島に同行した中家刑事は「荒木は此処のパソコンを使用していたか？そのパソコンはどれか？」と尋ねた。

店長は「荒木は最近よくパソコンでインターネットを楽しんでいるようでした。毎日5時間程度は遊んでました。そうそう金廻りが良くなったのはネットのお陰ともいつてました」と答え「パソコンはこれです」と案内した。

さらに中家刑事は「荒木の通信履歴はあるか？メールアドレスは？URLは持っていたか？」と城島の不得手な部分を補助するように質問を続けた。

店長は「今お聞きになった事はこれでよいでしょうか？」と中家刑事の質問に全てを答えることが出来た。

時代を感じさせる言い方をするが、勘ピュータを自認する城島が荒っぽい云い方で「店長、今日は特別に外の捜査はしないのだから、荒木が使用したこのパソコンをしばらく預かるが構わんな！」と店長に引導を渡すように云った。

城島のいかつい態度に恐れをなしたインターネットカフェ「光路」の店長は「どうぞ、どうぞ協力を惜しむことはしませんのでなんなりとお申し付けください」と二つ返事で了承した。

これを見ていた中家は、いざという時の城島のクリーンヒットに感心しながら、丁寧にパソコンを梱包押収して持ち帰る準備をした。

城島と中家は「また聞かせてもらいたいことがあるかもしれないので、その時は宜しく」と礼を云い、インターネットカフェ「光路」を後にした。

流しのタクシーを拾い、車の後部トランクにパソコンを収納し、次に向かったのは被害者木本新二が勤めていた同区内のインターネットカフェ「有線」で、店にはすぐ到着し、警察手帳を見せたのち車を待たせて二人は店内に向かった。

インターネットカフェ「有線」の店内は、まるでインターネットカフェ「光路」と同じではないかと間違えるような所である。二人は「よく似たところが有るものだ」と思いながら、先と同じように店内を見渡し、店長を呼び今度はいきなり警察手帳を見せ数人の客がいるのを構わず、殺された木本の写真を見せ本人確認しながら、木本新二が殺害されたことを告げ「不法営業の捜査ではなく、今日はこの事件の聞き込みに来た」と言って店長の緊張を解すようにした。

インターネットカフェ「有線」の店長は先程の店の店長とは違  
どこかホストクラブから出てきたような容姿の若い子供の様な人物  
で「どのような質問でしょうか？」と木本新二の事件を知った上  
で落ち着いて尋ねた。

城島達は「木本新二の最近の勤務状態はどうだった？変わったと  
ころは無かったか？」と尋ねた。

店長は城島達を警戒しながらも「別に変ったところは無かったが、  
店の給料以上に金遣いが荒くなり、毎夜近くの行きつけをつくり、  
一晩に使う金は大手の会社経営者並みでした。私も同席したことが  
有り、どうしたのと聞くと、競馬の必勝法をみだしたので簡単に  
稼げるようになったと答えていた」と説明をした。

城島は中家の先手を取って「木本新二はパソコンを使用したこと  
は無かったか？インターネットで遊んではいなかったか？」と尋ね  
た。

店長はしばらく考えるようにしたが「そう云えば、前はあまりイ  
ンターネットを使っていたことが無かったのですが、ここ半年前頃  
からは一日約5、6時間は個室をキープして熱心にプレイしていた  
ようです」と答えた。

城島は「そのパソコンはどれか？彼はメールアドレスを持ってい  
たか？URLはどうか？」と中家を教師として店長に尋ねた。

店長は素直に「パソコンはこれです、パソコンメーカーでサルベ  
ージをかければデータを消去していても復元できます」と専門家ら  
しく答えた。同時に「彼のメールアドレス、URLはこれです」と  
メモを取って渡してくれた。

城島が「・・・パソコンをしばらく預からしてくれ・・・」  
と云わんとした時雰囲気を感じていた店長は「このパソコンを調  
べてもらえれば木本新二のある程度のことは判ります」と自ら差し  
出すことを提案してくれた。

中家は丁寧に提供されたパソコンを梱包し、城島と中家は店長に  
礼を云い、また聞くことが有るかもしれないと告げ、インターネッ  
トカフェ「有線」をあとにし、待たせておいたタクシーにパソコンを  
収納し乗り込んだ。

運転手に霞が関PP署と告げ、車は走り出した。車中、城島は中  
家からインターネット関連の常識を猛獣のようにガツガツと食い漁  
るように吸収した。

約35分後タクシーは霞が関PP署に着き時刻はすでに午後1時  
を過ぎていた。

署にいた白石が手伝いに来て預かったパソコンを慎重に捜査本部  
に搬入し、のどがカラカラになった二人は白石を入れ3人で署内に  
ある自販機でアイスコーヒーを買いゴクンゴクンと周囲をばから  
ずひと息入れた。

汗を拭いてつかの間の休息をしていたところへ、白石は「御留守  
の間に猪熊警部から第4の事件被害者、小熊大学教授金子俊夫の死  
因につながる銃弾の発見をするため協力を求められ、三田、古田と  
鑑識班全員を事件現場の再調査に出しています」と報告が有った。

また、城島が気にして猪熊に頼んでおいた、第2の事件被害者墨  
田啓介の爪に残された犯人の皮膚組織のDNA鑑定結果と関係者の

DNA照合について本部鑑識の森野が室田監察医務官のところへ捜査していると伝えた。

午後2時30分、疲れた表情をして猪熊、駒田、沖本の3名が捜査本部に帰ってきた。

すぐに白石は淹れ立てのレモンティーを3名に出し、城島達は「ご苦労さん疲れただろう」と労った。

猪熊は疲れながらも「1から4件の事件被害者は総じて政治の政策批判をノンフィクションとして公表公然としかも強く著書、TV番組、新聞、雑誌等で発表していることが分かった。それらの著書情報は下町に行くほど購読されており、あとからデータを作成しておくが全てベストセラーに近く販売されていることが分かった。」と概略を説明するとともに、購入してきた多数の著書を城島に渡した。

続けて猪熊は「これらの著書には政治家、官僚の不正なども堂々と名指しで記載されており、充分殺害の動機になりうると自分は思う」といい「城島の勘が当たっているかも知れないと思うことしきり」と付け加えた。

尚と猪熊は「これらの著書と同じようなノンフィクションを執筆しているその他の著者は、先の1から4件の事件被害者だけでなく出来るだけ正確に計測したところあと3人の知識人文筆家がいる模様だ」と付け加えて報告した。

続けて猪熊は「今後、さらに事件が発生しなければ良いが……」と案じるように話した。



猪熊がそうした報告をしていたところへ第4の小熊大学教授金子俊夫殺害事件現場に出ていた鑑識班と三田、古田が戻ってきた。執念と思える捜査を実践したらしく彼らも疲労は極限に達していた様で、口が重くなっていたが、若い新人の古田刑事が「弾が見つかりました。現場の近くの喫茶店壁面で落下し道路際に落ちていました。現品はすでに本部鑑識課に送りましたので手元ありませんがまもなく銃器を特定する線条痕の判定が出るはずですよ」と城島を見つめて報告した。

城島は彼らの姿を見て、すぐに署の地下室喫茶に、彼らの好きなハンバーグ定食とコーヒートのセットを全員分注文し配達させ「先ず休憩しよう話はそれからだ」と遅い昼食をさせ、少しの休憩時間を取った。

午後3時半、ついにこの事件のつながりを確定する情報が本部鑑識より舞い込んだ。

報告は森野からで「第2件目の墨田啓介の殺害事件で、被害者の爪に残っていた皮膚組織のDNAと第5件目の若者2人の殺害事件の被害者のうち、荒木孝三、21歳のDNAとが一致しました」との報告であった。

猪熊は「これが城島の持つ捜査の勘だ！」と思わず大声で叫んでいた。

・続きは次回の更新をお待ち下さい。

(6)

[戻るtop](#)

[戻る\(index\)](#)

[戻る\(sub0021\)](#)

## 第五章 捜査の進展

捜査に出かけていた全員が所轄の霞が関PP署に戻り、各々が報告し全員が情報を共有したのは午後5時を廻っていた。事件が益々複雑な内容を示してきたので、捜査会議は明日の午前9時にする。こととし、事件を考察し整理するためこの日は早めに帰り休養を取ることにした。そうしなければ城島でさえ頭が混乱して、誤った考えに固着してしまうと思われるからである。

皆を帰らせてから城島は猪熊に「お前、あと3人も同じような批判をするノンフィクション著述業をしている者がいるといったよな」と確認するように言った。

「ああそうなんだ、今後何もなければいいんだが……」と心配そうに猪熊は肯定した。

それを確認した城島は「事件を未然に防ぐことも我々の重要な仕事だ、一緒に来てくれ」と猪熊に同行して貰い、上の階にいる上野捜査14課課長を訪ねた。

城島と猪熊は「事件被害者が共通して著述業等の文筆活動家に集中している。また同じような批判的ノンフィクションを公表してい

る者で、この事件と関連すると思われる者があと3名いる」と上野課長に説明し、ついでには新たな事件の未然防止のため、身辺警護をしないと申し出た。

上野は少し考えた後「なら、身辺警護を訓練された警視庁本庁の機動隊がいるので、頼んでみようか」と快く引き受けてくれ、早速、上野は本庁と掛け合ってくれた。

本庁から、身辺警護の開始を明日から実施するとした約束を貰うことに成功した城島と猪熊は「ありがとうございました、これで明日から心配なく捜査に邁進出来ます」と敬礼をして上野課長室を退出し署をあとにした。

久しぶりに夕陽を見ながらの家路についた城島と猪熊は「少し飲まんか？」とどちらともなく声をかけ、駅前のビヤホールで喉を潤した。極度に疲労した二人の体にはつめたく冷やされたビールが沁み渡り心地よい酔いがまわった。

明日からの捜査を充実したものとするため二人はお互いの自制心を示し、「では、明日また」と声をかけ合いお互いの家路を急いだ。

家に帰り着いた城島は、妻の絹代が少し熱めに沸かしてくれた風呂に入り疲れを癒し、そのあと黙って夕食を済ませ、精神を統一するために自宅をリフォームした折に城島の「我」で作った、暗闇に小さなブルーのLED光源から放射される星の様な一点を見つめることが出来る部屋でリクライニングシートに腰をかけ、瞑想するように最初の事件から今日までの複雑な内容の整理を始めた。

城島がこうした行動をするときは捜査の山場にさしかかっている時であると妻絹代はよく認識していた。

絹代は黙って食卓テーブルに熱いお湯を入れたポットとインスタントコーヒのセットを置き、寝室に向かった。

最初城島は「事件はどうやら俺の不得意な分野……パソコン？……インターネット？が最終的に関係してくる？」と呟いた。

「事件の1から4件目の被害者は何故殺されなければならなかったのか？彼らは何をしたのか？」と考えた。

「猪熊が調べてくれた被害者達に共通していることは、ノンフィクションとして時の政府の開示したくない部分を明らかにし、著書、新聞、TV、雑誌で公開してきた。著書はベストセラーになるほど読まれている。……政府は困るよなあ……？」と考えを進めた。

「単純に考えると政府に事件の動機は充分あるなあ……？動機はノンフィクション性が高い風評のせいか？」と思った。

「政府以外に動機のあるものは？……いない！？」とも考えてみた。

「もしそうだとすれば、被害者達は政府の問題の何を重点的に暴露していたのか？……殺害されなければならないほどの理由があるのか？……絞り込んだ調査が必要になりそうだ……明日誰かに調べてもらおう……」と決めた。

そのあと城島は頭を切り替えて「しかし第2の事件被害者の墨田啓介の爪には抵抗した際に残った、21歳の若者、荒木孝三の皮膚組織が有った……墨田を殺害したのは間違いなく荒木孝三だ……しかし荒木孝三は第5番目の事件として殺害されている。

何故？・・・二人の間に怨恨、金銭事情があつたとは立場にかなりの差があるので考え難い。・・・？」と考察を進めた。

「墨田啓介と荒木孝三の接点はなに？・・・この部分に事件の鍵が有るのではないか？・・・。」と考えてみた。

「他の事件被害者の殺害凶器は1番目の事件、3番目の事件が刃物で発見されていない。・・・4番目の事件が銃で、今日の午後凶器の銃弾が発見されたばかりで現在線条痕を調査中・・・。」と自分に再確認をした。

「やはり一連の連続殺人事件は墨田啓介と荒木孝三の接点が最大の鍵を握っており、動機は荒木孝三と木本新二の周辺にあるとして間違いがなさそうだなあ・・・。」と結論のように考えた。

「しかし荒木孝三と木本新二の両名とも殺害されている・・・誰が？動機は？・・・分からん・・・。」と悩み、城島は暗闇の中で目を閉じた。

しばらく目を閉じていた城島が暗闇でも赤や青く光る獣の様な目を開いたのは数分後のことであつた。

「そうだ！荒木孝三と木本新二が使用していたパソコンを調査すれば動機につながるかもしれない・・・？」と昼間、インターネットカフェ「有線」の店長が云つた「サルベージ」のことを思い出した。

「明日の捜査会議では特に荒木孝三と木本新二の周辺捜査とパソコンのサルベージを重点項目として取り上げよう」と決めた。

「また、二度も違う事件の現場にいた内閣官房庁補佐官の車屋喜久治は、政府に動機が有るとすれば捜査に値するのではないか？・・・どのようにして捜査する？・・・議員特権もあるしなあ・・・」と長時間思索していた。

「しかし内閣府の高官が二度も巷の事件現場に居るはずはない・・・間違いなく何かの理由がある！・・・」と自分に確認した。

そして城島は「明日、上野課長らに再度事情説明をして考えてもらおう」と決意した。

このように暗闇の中で事件の整理に集中した城島には眠気などは無く、むしろ続いて考えようとしたが、時間の経過に伴う疲労感と喉の渴きを覚えたので部屋を出て食卓テーブルに行き、絹代が置いてくれたコーヒーを美味そうに飲み喉を潤した。

テーブルの時計で時を見ると午前2時の深夜になっていた。まだ続いて考えを纏めたかったが今朝の捜査会議に遅れてはまずいと思うのが勝って、先に寝た絹代のいる寝室に向かい、起こさないように細心の注意を払いベッドに潜りこんだ。

捜査会議は朝9時から城島、猪熊以下9名の捜査員全員が参加して開かれた。

冒頭、城島は深夜にわたる集中考察の結果と決意した捜査項目を全員が充分理解するまで時間をかけ説明した。

捜査員全員は「全く同感！すぐ手分けして捜査にかかりませんか？」と誰もが手を挙げながら異論なく賛同した。

その時、本部鑑識の森野から猪熊に「昨日の、第4の事件現場で発見された銃弾の線条痕と第5の事件で使用された線条痕が一致しました。同じ拳銃の旧ソビエト製のトカレフ3065・32口径改造拳銃です」と城島や猪熊が予想した通りの結果が報告された。

城島は「やはりそうか！ならばひよつとして荒木孝三と木本新一以外に他の共犯者がいたかもしれない？」と云い、さらに「もし共犯者がいたとすればその者は生存していると思う」と考察し、説明した。

そこで城島は捜査員を3班に分けた。第1班には白石、駒田、沖本を配し、第2班には三田、古田、谷口を配し、第3班には黒田、中家、横田を配し、城島と猪熊は捜査本部で指揮をとるとともに、上野課長との相談をすることにした。

第1班には「被害者の文筆家たちがどんな問題をノンフィクションとして暴露していたのかを絞り込んで捜査してくれ」と頼んだ。

第2班には「荒木孝三と木本新一が使用していたパソコンのサルベージ捜査をし、事件に関係が有ると思われる事を発見してくれ」と頼んだ。

第3班には「荒木孝三と木本新一の周辺捜査を開始し、事件と関係するものを何でも見つけてくれ」と頼んだ。

午前10時半ごろ捜査会議は終了し、各捜査員は一斉に捜査に向かい走り出した。

捜査員が出かけた後、城島は捜査本部に猪熊を残し「今から上野課長に例の件をかけ合ってくるので、悪いが留守を頼む」と頼み、

急ぎ上野課長の部屋に行った。

上野課長は「そろそろお前が来そうな気がしていたよ、内閣官房庁補佐官、車屋喜久治の事情聴取の件だろう？」と城島の用件を見抜いていた。

城島は深夜に考察した内容を上野に懸命に説明し「どうしても事情を聴く必要が有りますので方法は有りませんか？」と厳しい表情をして詰め寄った。

上野は城島の眉を吊り上げた厳しい表情に押されながら「俺もあれから何か良い方法は無いかと考え抜いた。で、一つの考えが浮かんだ」と最初に云いながら「こうなったら本庁のキャリアー達も一目置く我が署の蛭川実署長に依頼するほかないと思っっているんだ」と云った。

城島も蛭川署長の知る人ぞ知る「政治家の疑獄事件を処理した伝説の武勇伝」は先輩刑事から聞かされており、よく知っていた。

「うん、それですね！・・・それが良いですね」と城島も反応した。

「ではこれから直ぐ署長に会いに行こう」と上野は城島にいい、署長室に内線をかけ署長の了解を取ってくれた。

上野と城島は霞が関PP署の最上階にある署長室に行き、ノックをして内部に入った。

蛭川署長は片手に内閣官房庁から交付される広報を持ち「おお、ご苦労さん其処にかけてくれ」と云いながら、上野と城島を誘導し



ながら応接にかけさせ、自分もドシツと座り二人の顔を見た。

上野の合図で城島が説明しようとして「実は……」と云いかけたのを遮るように、蛭川は「分かっている、内閣官房庁補佐官、車屋喜久治を事情聴取したいんだろ」と云った。

これには上野と城島の二人とも今までに経験したことのない驚きを隠せず「どうして分かったんですか？」と思わず訊ねてしまっていた。

蛭川は「署内の出来事が分からなくては署長は勤まらんよ」と二ヤリと笑いながら二人の顔を見た。

「任せてくれ俺が直接警視庁公安部の中西と同行して、内閣官房庁補佐官、車屋喜久治に会い任意の事情聴取に応じてくれるよう頼んでくるから安心しろ」と蛭川は力強く云ってくれ、公安部の中西と蛭川は疑獄事件の折、一緒に捜査した仲間であると付け加えてくれた。

署長蛭川の話聞いた上野と城島は何とも言えない安堵感を感じ取ることができた。

「それでは宜しくお願いします」と敬礼して部屋を出た二人は「良かったな……進むぞ」と互いを確認し合っていた。

上野と別れ捜査本部に戻った城島を待っていたのは、留守番を頼んでいた猪熊と帰着した第1班の白石、駒田、沖本の3捜査員であった。

早速捜査結果を報告しようとする3名の捜査員に「ちょっと待て、

もう昼だ」と城島は皆を制止し、「少し早いが昼飯を食いに行こう」と誘い、捜査本部の机の上に大きな文字で署の左横にある和食屋「心」に行っているから来るようにと、第2班、第3班の捜査員によく分かるようメモを貼り付けた。

和食屋「心」の8畳ぐらいの部屋に城島と猪熊を含め5人が着席し、メニューを見て注文しようとしていたところへ、運よく第2班、第3班の6名が到着し「良かった間にあった」とあとから到着した捜査員達はそう云いながら長い和テーブルに着席した。

城島は何時になく上機嫌で「さつき、署長と会って内閣官房庁補佐官、車屋喜久治の事情聴取をできるよう頼んできた」と簡単に経緯を説明し、「今日は特別なメニューでも構わんしっかり食ってくれ、全て俺の奢りだ安心して食ってくれ」と大判振る舞いをすることにした。

城島がこのように機嫌がいいのは素晴らしい捜査の手本を見せてくれた蛭川署長と会う事ができたからである。

捜査員の皆が「それでは私の班から報告を……」と切り出すのを遮り、城島は「まずは腹ごしらえだ。報告は署に帰ってからやる」と全員に指示し、其々は遠慮をすることなく好きなメニューの昼食をたいらげた。

午後1時、猪熊、城島をいれ計11名全員で捜査会議は開催された。

・続きは次回の更新をお待ち下さい。

(7)

[戻る top](#)

[戻る \(index\)](#)

[戻る \(sub0021\)](#)

更新日: 2010.06.10

第1班は各被害者の文筆家たちがどんな問題をノンフィクションとして暴露していたのかを報告した。

第1班の白石は「1から4件目の事件被害者達の唯一の共通点は新聞やTVがほとんど取り上げない内閣官房機密費について、その性格、使われ方、税務上の処理等に多くの疑問点があり、実態はこうだとノンフィクションタッチで内容を暴露してきた事につきますと捜査の結果を報告した。

その上で第1班の駒田は沖本とともに「それらの事は昨日我々が集めた各被害者の著書に克明に記載されており、具体的には、機密費の性格は内閣官房が任意の思いでいくらでも支出することが可能なもので、使途についての報告義務もなく領収書も不要な、何の制限も受けない自由自在に使える公金で、勿論税務処理は必要としない金です」と述べさらに被害者らの著書では「主に世論誘導、マスコミ抱き込み等、戦後60年間に政治をビジネス化させてしまい、食い物にしてきた首相の所属する政党の低下し続ける支持率UP工作等に使われていると述べています」と付け加えた。

第2班は荒木孝三と木本新一が使用していたパソコンのサルベー

ジ捜査を行い、事件との関連内容を報告した。

第2班の三田は「パソコンメーカーに出向きサルベージを行いました。当該パソコンのハードディスクからはデータが多分意識的に消去されていきましたので、サルベージ技術で復元をしました。尚、以後の調査は署の鑑識班で可能です」とさすがにパソコンを使い慣れている者らしい報告を始めた。

さらに三田は「あとで外づけハードディスクのデータを見てもありますが、復元した情報には極めて不審なサイトが利用されておりまた荒木孝三、木本新二とも不審なやり取りをしていることが分かります」と述べるとともに「荒木、木本以外に事件と関与すると思われる第3の若者らしい人物と全く予想できないもう一人の人物が関わっているように思われます」と報告した。

次いで同班の古田と谷口が「もっとも不審で、荒木と木本の両名が頻繁に利用したサイトの名称は”ようこそアンダーグラウンドへ”と云うページで、そこでは不法な取引、危険な仕事、覚せい剤、復讐請負等、通常の世の中には馴染まない行為を依頼、請負する仲間を集っています」と云い、また「そのページではチャットと云うコミュニケーション手段で依頼したり引き受けたりする合意形成をしており、さらに復元データを解析して調べるが荒木、木本は頻繁に利用していた様子です」と綿密に報告した。

第3班は荒木孝三と木本新二の身辺捜査をし、事件との関連を報告した。

第3班の黒田は「荒木孝三と木本新二を別々に知る人物（桑田建22歳）に会って写真を見せながら質問したところ、約半年前までは二人が一緒に居ることは見無かったが、数ヶ月前から一緒に居る

所を見かけるようになり、最近はかなり派手な遊興をするのを目撃していたとのことで「さらに「桑田建が二人に聞くと荒木はネットで商売をして大金が入った。木本は競馬の必勝法を考えだし金が入るようになったと云っていました」と状況をメモなどで示しながら報告した。

次いで中家と横田が思いだしたように「黒田さんその時、荒木と木本に同行して遊んだ桑田建は、名前はよく聞いていないがもう一人同年輩らしき半袖のスポーツシャツを着込んだ仲の良い友人らしく話をする人物がいたと云ってましたね」と確認するように云った。

黒田は「そうだ、桑田の話ではその人物は今までにあつた事のない人だつたと言つた」と報告した。

第3班の報告が終わるとすぐに「荒木と木本は二人ともURLを持ち、メールアドレスを持っており、消去されたハードディスクの復元データではURLでは客引きをインターネットでしようとしたのか普通の簡単なページを作っており不審に思われるものではなかった。」と第2班の捜査員達は報告した。

しかし、「メールアドレスは」ようこそアンダーグラウンドへ”のページで登録に使われ、チャットでは偽名で頻繁に使用されていた・・・？」と第2班の三田は考え込むようなくさをして述べ、古田は「捜査本部鑑識班のパソコンで復元データにあると思われるチャットの記載内容がどんなものであつたかこれから調べます」とも少し時間があるように報告した。

報告を聞いていた城島は「そのチャットとかアンダーグラウンドとか云うのはなんだ？」と云いかけようとしたが、あまりにも幼稚なように感じたので胸にしまい後で猪熊に聞くことにした。

城島はパソコンは苦手だが、刑事としての勘は云うまでもなく鋭い「やはりもう一人の人物？仲間？がいるなあ」と云いだした。さらに「その人物が荒木と木本を殺害した犯人の可能性は高い。そして、その人物は生存していると考えねばならない」と話した。

さらに城島は続けて「ネットの商売？競馬の必勝法？そんなものですぐに豪遊できる筈がない！それはまだ分からないが何かの報酬ではないのか？」と疑問を投げかけ、「ただ、大金がインターネットの何かと結びついて得られているものと考えるが皆はどう思うか？」と捜査員全員を見渡しながら意見を求めた。

それまで一言も発言しなかった猪熊が突然「第1班から第3班の報告を総合すると、犯人の動機はうるさく事実に近い問題点を暴かれ、一般大衆に知られては困る人物又は組織で、犯行には若者を使った。手を下した若者は3名、内2名は殺害された。尚、1名は生存していると城島は見ているのか？」と話を纏めるように訊ねた。

猪熊は続けて「そうであれば、犯人グループの残る一人の生存者は主犯にとって邪魔な存在となるなあ？」と自分に言い聞かせるように云った。

ハツとして城島は「早く不詳の若者を見つけないと消されてしまう！主犯は若者が誰か分かっているのだ」と焦るように云った。

城島は捜査員全員に「会議は此処までとし、至急三田と古田、谷口に協力して若者を見つけ出し身柄を確保せよ」と強い口調で指示した。

三田と古田及び鑑識班の谷口は霞が関PP署、鑑識班にあるラン

ケーブルで結ばれたパソコンに、サルベージして保存してきた荒木のデータが入った外付けハードディスクを接続し、データの解析作業にかかった。

他方、捜査員の駒田、沖本、中家の3名とそれをフォローするように鑑識班の他のものが協力して、あいているランケーブルで結ばれたパソコンに木本のデータが入った外付けハードディスクを接続し、データの解析を開始した。

パソコンを仕事の道具と考える彼らの作業は、見ている城島や他の捜査員達を驚かせるようなスピードで進めていった。

間もなく古田が三田と谷口に了解を求めるようにして「警部、荒木はチャットで須田と云う人物と頻繁に会話し、須田は荒木に特別旨い仕事があるが参加しないか？と誘っており、荒木にメンバーを3名用意しろと躊躇する荒木に誘いをかけています」、さらに「了承なら2時間後にチャット上で返事しろと書きこまれています」と報告した。

続いて三田が「須田のメールアドレスはkws0824@king.kbone.jpと有りますが、調査したところ、このアドレスは登録されていない架空のもので須田と云うのも信じられません」と話し、今アンダーグラウンドの管理者に登録情報を確認中です。また送られたアドレスの調査も同時に行っていますが分からない場合もあります」と報告した。

城島は「そんな話より荒木、木本以外の若者の情報は無いのか？」と少しイラついて見せた。

別のパソコンで作業していた駒田が「警部、木本がチャットに参

加し、荒木にその仕事をしたいとその日に意思表示しており、木本と荒木は仲良くチャット上で会話しています」と城島に伝えた。

城島は「荒木と木本のことはいいんだ、外に若者は出てこないか？」と再び厳しい態度で捜査員達を叱咤した。

約10分ぐらい経過しただろうか、三田が「ありました！ありました！あの方で出てきました。名前は偽名でしょうけれどアウデイーと云う人物が荒木に連絡してきたデータが残っています」とやや興奮気味に報告した。

城島は「でかした、そいつだ！本人確認するにはどうしたらよいか？」と三田をはじめ捜査員の全員を見渡し意見を求めた。

古田は「名前は偽名でも登録メールアドレスはそのまま使っているかもしれないので調べてみます」と云って作業にかかった。

そして古田は「想像通りメールアドレスはそのまま使っています、プロバイダーの契約ではSSPCと契約しており、長野県在住の小池智雄22歳であることが判明しました」と城島ににこりとした表情を見せながら報告した。

よしと城島は手の空いている白石と黒田に命じ、「上野課長に連絡して逮捕状を取り、指名手配の上、身柄を早急に確保するよう手配してくれ」と素早く反応した。

一方、データの調査を進めていた三田が「須田は約2時間後にチャットに参加し、荒木から用意できたと聞き、それではその日の2日後に東京駅中央コンコースで、午後1時、赤の帽子、サングラス、グレーのスーツ、赤と黒のストライプの入ったB4サイズの紙袋を



持ち、背丈173センチやせ形の人物が私だ。君達が驚くような報酬を支払うのでぜひ来てくれと書き込みがありました」と城島に報告した。

城島は「主犯はこの男だな、この内容は何時頃のものだ?」と三田に訊ねた。

三田は「データ履歴を見る限り半年前くらいです」と多少曖昧に答えた。

さらに三田は「須田がチャットに参加した時の登録メールアドレスは赤坂女子高校の職員室の代表アドレスで、追跡を試みましたが新しいデータは発見できませんでした。」と報告した。

この後城島は捜査を続けてくれと言い残し、猪熊と一緒に捜査本部に戻り、先程頼んでおいたもう一人の生存していると思われる長野県在住の小池智雄22歳の手配状況の把握に全力を入れた。

通報を受けた長野県警本部は捜査員が小池智雄の自宅に踏み込み身柄の確保に向かったが、家人の話によると約一月前から不在で東京に行っているのではないかとこのことで、所在は依然として不明であった。

長野県警は昨年撮影された小池智雄の写真を確認し、これを城島に専用のISDN回線で鮮明にして送ってくれた。

城島達は各地区の警察に写真を送り都内全域に緊急手配した。

ここまで手配を急いだ理由は小池智雄が犯罪者であると同時に背後に潜む巨悪を逃がさないよう証言を求めると犯罪者であって

もその命を保護する事にあることは猪熊、白石、黒田とその他の捜査員は充分認識していた。

何の手がかりもないうち署の外を見ると既に真つ暗な暗闇に街灯、車列のヘッドライトが揺らぐ夜中になっていた。

各捜査員は夕食、夜食を取ることも忘れ懸命に与えられた捜査を実施していた。

午後12時を廻らんとした時、一本の電話が捜査本部につながれてきた。城島が出るとかぼそい声で「俺、誰かに狙われている。助けてくれ」と男の声がした。城島が「小池智雄か？」と尋ねると、小さな声で「そうです、すみません」と答えた。

城島が「どこに居るのか？」と訊ねると、男は「日比谷公園でホームレスに姿を変えて隠れています」と答えた。

城島は猪熊に目で合図し「その位置から動くな、君は狙われている。自分達の到着を静かに待て」と百戦錬磨の刑事らしく要領よく小池智雄に伝えた。

たちまち全捜査員は色めき立ち、捜査出動準備をすぐに整え、目と鼻の先にある日比谷公園にサイレンも鳴らさず静か接近し、小池智雄が云った場所で、写真で本人確認をして、無事小池智雄の身柄を確保することに成功した。

幸いにも容疑者小池智雄の健康状態に問題は無く、霞が関PP署に到着したあとの小池は安堵したように大きな息を繰り返し捜査員にもたれかかるようなしぐさで仮留置場に収監された。

城島は慌てて取り調べるようなそぶりを見せず、また逮捕状の執行もせずに「今日はもう安心してゆっくり休め、明日詳しい事情を話してくれ、頼むな・・・」と小池智雄を安心させるようにして、捜査本部に戻った。

捜査本部に戻った城島は「皆有難う、お前達の努力の結果がこうも早く出たことは嬉しいことだ、有難う！」と感謝の気持ちを最大限にあらわした。

城島は「小池智雄の調べは明日から始める。今日はここまでにして帰ろう、ご苦労さん」と各捜査員を仕事から解放した。

・続きは次回の更新をお待ち下さい。

( 8 )

[戻る top](#)

[戻る \( index \)](#)

[戻る \( sub0021 \)](#)

更新日：2010・06・15

## 第六章 捜査の急展開

最初の事件発生から6日目の朝、霞が関PP署の付近は昨夜からの霧雨が降り続き、辺りは靄が立ち込めた肌寒い梅雨空になっていた。

城島が白石と新人刑事の古田を伴って、小池智雄が収監されている仮留置場を訪れたのは午前9時過ぎであった。既に小池は宿直の警務官から出された朝食を綺麗にたいらげ、昨夜からの安ど感に満ちた表情をしていた。

城島は「ではこれから君に聞きたいことが有るので別の部屋に行つて貰うよ」とこの段階でも逮捕状を執行せずに小池を促し、城島達のいる捜査本部右横にある取調室に小池を案内し、テーブルの椅子に座らせた。

取調室では、部屋のコーナの机で古田刑事が記録係を務め、城島と白石は立ったまま小池に話しかけた。

城島はそれまでとは違うマムシともホウジロ鮫ともつかない様な怖い目と顔に変わり、いきなり「お前、どうして命が狙われたのか覚えが有るだろう！」と睨みつけるように切り出した。

小池は吃驚した表情をして「……………?」長い間合いの沈黙を持ち質問に答えようとしなかった。

この時城島は逮捕状を小池に示し「小池智雄、隅田川河口連続殺人容疑で逮捕する」と小池に伝えるとともに、逮捕時間を古田に記録させた。

城島は「もし昨日お前を保護していなければ、今日の朝には荒木木本と同じようにものを云わない死体になっていたかも知れないのだ」と大きな声で恫喝した。

小池は急に、昨日助けを求め連絡をしてきた時のようにかぼそい声になり「……………あれは僕の勘違いかもしれません？」と「否

定するように反応した。

続けて城島は「荒木と木本を殺害したのはお前だろう！」と強く問いかけた。

小池はなおもかぼそい声で「なぜ僕が荒木と木本を殺さなければ・・・？」と卑屈な上目づかいで否定するように云った。

城島に代わって白石が「拳銃、トカレフ3065・32口径という特殊な改造拳銃を使用したことは無いか？」と話を逸らすように、小池の反応を見るために突然訊ねた。

小池は白石の問いにこわばる様な表情をみせながら「そんな拳銃など見たことも触ったこともありません」と答えた。

取調室の外ではハーフミラーを介し、小さく音量を絞った拡声器から流れるやり取りの内容を聞いていた本部鑑識の猪熊警部は、そばに居た三田と谷口、中家に「至急小池智雄の経歴調査をし、拳銃にかかわるものが無いか調べて城島達の援護をしないと・・・」と呟いた。

猪熊の呟きを尤もと考えた3人は、谷口と三田がパソコンや長野県警への問い合わせなどで経歴調査にはいり、中家は駒田、沖本を同行して、小池が東京でよく立ち回っていた池袋のインターネットカフェ周辺での聞き込み捜査をすると手分けして行動を開始した。

一方取調室の城島は「アンダーグラウンドと云うサイトのチャットで、死んだ荒木と木本及び須田と云う人物とお前が頻繁に会話し、大金の報酬で須田が依頼する仕事を引き受けたことは分かっているんだ」、「お前達3人が事件前に須田と東京駅の中央コンコースで

会ったことも既に分かっている」、「その仕事とは望月宏、墨田啓介、福本百合子、金子俊夫の殺害委託だったんだろう」、「墨田啓介殺害事件の場合には、この連続殺人事件にお前達が関与したことを示す荒木のDNAが検出されているんだ」、「何かの不都合でお前が仲間の荒木と木本をトカレフで射殺したんだろう」とそれはもう立て続けにつきつけ、小池に合理的な説明ができるかを追求した。

城島の追及に小池は「・・・・・・・・・・・・・・・・・・？」と顔を下にして何も喋らなくなった。

城島が取調室の掛け時計を見ると時刻は11時半を少し過ぎていた。

「では、少し休憩しよう。小池、午後からは正直に全部話してくれよ」と城島は小池を諭すように、一方的ではあるが話をして午前の取り調べを終え、小池を仮留置場に戻した。

取調室から出てきた城島と白石、古田に横田と黒田を加えて猪熊は、三田と谷口及び中家と駒田、沖本に頼んだ行動内容を伝えた。城島は「すまん、さすが我が酒友猪熊だ、取り調べながらそう思っていたところだ」と訳のわからない表現を交えながらも率直に喜んだ。

城島は「それでは彼らの戻りを待つて捜査会議を開いた後、小池の取り調べを再開することにする」として、署内の食堂で簡単な昼食を取り三田達の報告と中家達の帰りを待った。

捜査員の全員がそろったのは午後1時20分頃で、早速捜査会議は開かれた。

三田と捜査していた谷口からは決め手を得たとばかりに「長野県警によると、小池は2、3年前から度々韓国釜山を訪れており、実家近くにいる小池の友人、菊池遼の話では釜山の実弾射撃場に入りしていた模様」と報告が有った。

同時に三田は「直接射撃場に連絡してプレーの内容を聞いたところ、45口径までの銃を実射出来る、日本人等外国人向けの射撃場で、安全措施を施したモデルガンも販売しているとのこと」と付け加えた。

聞いていた城島が三田に「販売しているモデルガンにはトカレフ3065 - 32口径はあるか？と今すぐ聞いてくれ」と指示した。

会議中にもかかわらず三田は席を外し、日本語の分かるスタッフががいる韓国釜山の該射撃場に直接電話連絡を取った。

続いて中家が「小池が例のチャットに参加するために使用したパソコンは、池袋にあるインターネットカフェ”パイン”にあり、小池は店の常連客で有りました」、尚「使用したパソコンは証拠品として押収することを店側に了解してもらいましたので持ち帰っております」と報告し、さらに「パソコンはこれからデータの消去はしていないので、鑑識班で詳細な調査をします」と付け加えた。

中家が報告したのに続き駒田と沖本が「小池はインターネットカフェ”パイン”で、友人の事業に協力して大金持ちになったと、3000万円弱の預金通帳を見せながら周囲に自慢していたと、周辺から聞きこみました」と報告した。

駒田と沖本の報告が終わるのを待ちきれないようにして三田が「韓国釜山の該射撃場ではトカレフ3065 - 32口径の実弾実射は





小池は苦しそうな表情をしながらも「……………」と益々答えようとしなくなっていた。

少し城島が間をおいて決意したように「お前3、000万円余の金を持っているならすぐにでも弁護士を呼び、釈放して貰う事も出来ると思うよ。そうしたらどうか？」と刑事らしからぬ言葉を小池に云った。

城島は加えて「もしお前が取り調べを潜り抜け、数時間か数日内に釈放されて署から外に出ることができて、お前を消そうとする人物がいる限り、平穩な生活に戻ることはできず、いずれこの世から抹殺されることになるがそれでもいいのか？」と将来の危険性を小池に示唆した。

それまで完全に黙秘を通した小池が崩れたのは、城島のこの示唆であった。

小池は「ゲー、ゲー」と体に溜まった汚物を吐くように嗚咽し、城島の顔を上目づかいで見上げながら「すみません、すみません……」と何度も云いながら、蚊の鳴くようなかぼそい声で事件について語りはじめた。

よしと城島は翁顔の優しい目になり「お前はまだ若い、罪を償って立ち直ることが可能なんだから、全て隠さず真実を話せ」と諭した。

小池は嗚咽しながら「分かりましたお話しします」と正直に答える態度を示した。

取調室の中を見ていた捜査員達はお互いの顔を見合わせ、Vサイ

ンを誰もが示した。

城島は「誰に頼まれたのか？」と最初に訊ねた。と云うのも背後に潜む巨悪を意識したに他ならなかったからである。

小池は「須田と云う人です。しかし会った時はサングラスをかけた帽子を深くかぶり、顔をよく見ることはできませんでした。その後は一度も会っておらず、色んな指示はその時渡されたチャットと携帯電話で貰っていました、金はコインロッカーに入っていました」と話した。

城島は「須田と云う人物は確かお前達のチャットの中で、173センチの身長、やせ形と云う事だったな、間違いないか？」、「これは署で作った似顔絵だが、この人物に似ていないか？」と続けて聞いた。

小池は「身長とやせ形は合っていますが、似顔絵についてはやせ形の顔でよく似ているかもしれませんが、現実とは云えません」と正直に答えた。

小池は自ら「特徴を考えると話し方に少し訛りが有り、地方から出てきた人のように思います。訛りがどの地方のものか分かりませんが、もう一度聞けばこれだと分かると思います。」と城島にヒントを与えた。

城島は「お前が殺害したのは誰と誰だ？ 荒木、木本、金子教授に間違いないか？」と訊ねた。

小池は「はい間違いありません。自分の拳銃トカレフ3065 - 32口径で撃ちました。」と答え、「拳銃は発射口の鉛を取れば普

通に使えるようになることは韓国で知りました」と説明した。

城島は「なぜ金子教授を殺害したのか？」と問いただした。

「須田に金を貰って殺害しました。金以外の理由は有りません。」と小池は述べた。

実に大変な世の中になったものだと思いつつ城島は「では、荒木と木本を殺害した理由は？仲間割れか？」と続けた。

小池は「荒木と木本が須田に金をさらに要求し、実行されなければ事件をバラスと脅したため、殺害の依頼が須田から自分に来て、追加の料金として一人500万円で殺害する約束をしました」と云つてのけた。

「それで金は事件後どのようにしてもらったのか？」と城島が訊ねた時、小池が「自分の身が危なくなつたことをその時になつて感じました、貰っておらず、須田とも連絡はしていません」と救いを求めるように城島に云った。

「お前から須田と連絡する時はどのような手段でしているのか？」と城島は訊ねた。

小池は「荒木、木本もそうでしたが、東京新森スポーツの伝言欄に伝言を入れることで、相手から連絡を貰うようになっていました」と答えた。

城島は「望月宏、墨田啓介、福本百合子を殺害したのは誰か？」と話を切り替えて尋問した。

小池は「望月と福本は木本がナイフで殺害し、墨田は荒木が絞殺した」と淡々と答えた。

「お前はその場にいたのか？」と城島は訊ねた。

小池は「金を貰って殺害した4人は全て3人の協力で行いました」と供述した。

ここまで小池に供述させてきた城島は、金さえもらえば殺人であろうと何であろうと、被害者に対する謝罪の念等一切の感情もなく簡単に重大な犯罪を実行する世の中になっていることを教えられ、先程小池が城島の示唆で崩れた時に見せた城島の優しい翁顔、優しい目は消え、目の前に居る小池を被害者に代わり地獄に落としてやりたいと思わず自身が警察官であることを忘れるような衝動に駆られていた。

城島のこうした感情の高まりをそばに居た白石警部補が見逃すはずはなく「城島警部、ここからは私が調べてよろしいか？」と気を利かせた。

城島は「うん、すまんが俺の聞いておくべきことで落としたものが無いか考えて十分な調書を纏めてくれ」と白石に頼み、今までにあまり見せたことが無い厳しい表情をして取調室を出た。

こうした城島の厳しい表情を見た猪熊は「ポンポン」と城島の肩を叩きながら「小池達の様な悪党を作り上げ、それを利用しようとする巨悪がのさばっている直ちにその巨悪に立ち向かおう！」と落ち着かせるどころか火をつけてしまった。

再び獣のように城島の目が光った時である。

上司の上野課長が捜査本部にきて「オイ、城島。やったぞ！蛭川署長が内閣官房庁補佐官、車屋喜久治を任意事情聴取に応じさせることに成功したぞ」と息を切って連絡をくれた。

城島は「課長のアイディアの賜です。有難うございます」と最大限の持ち上げをし、先程来の厳しい表情を捨て精一杯の笑顔を見せた。

・続きは次回の更新をお待ち下さい。

(9)

戻るtop

戻る(index)

戻る(sub0021)

更新日：2010・06・18

白石警部補が引き継ぎ、小池智雄の取り調べが終わったのは午後6時少し前のことであった。

拘留期間延長申し入れを済ませ、小池をA-13留置室に移し替え留置を終えて、城島のもとに戻ってきた白石の額には疲れたのか薄らと汗が滲んでいた。

城島は「ご苦労さん、何か新しいことは有ったか？」と白石も感じたに違いない嫌な気持ちになった取り調べの労をねぎらいながら訊ねた。

白石は「ええ、奴は被害者に対して詫げる気持ちは無く、涙も流さず、金のためならまるでゲームのように人を殺害できる、血が通っていない現代の社会が作り出してしまった殺人犯でした」と目を赤くして報告した。

そして「警部も聞かれたと思いますが、須田と云う男は地方訛りが有ったと云うことと、私が小池に、須田から金以外に貰ったものが無いか問いただしていたところ、携帯電話とプリペイドカードを渡されたと聞いたので、小池の身体検査をしていなかったことを思いだし、身体検査を兼ねて出てきた携帯電話等を押収しました」、「また凶器のトカレフ3065・32口径改造拳銃は日比谷公園に隠したと云っていますので、明日の早朝、本人を立ち会わせて回収してきます」と城島の初歩的ミスをカバーしてくれていた。

小池の携帯とプリペイドカードを白石から預かっていた古田刑事は「警部、すぐこれを鑑識に回し指紋などの調査をして貰います」と気を利かせて城島に伝えた。

城島は「白石、俺の落とした部分をカバーしてくれてすまん。早速鑑識で調べて貰ってくれ」と白石、古田に指示した。

今日を締めくくる捜査会議は午後7時半から開かれた。

小池の自白が得られ、普通なら捜査員達は明るい元気な表情になつてよさそうに思えるが、城島をはじめ捜査員達の脳裏には簡単に

殺人に至る世の中を思い、全員が打ちのめされ厳しく辛い表情をしていた。

城島は時々見せる仁王いや閻魔の様な怖い顔をして「小池は逮捕し自首も得たが、皆も知った通り殺人の動機は金で、所謂、囑託殺人で有った。殺人犯の内、荒木、木本は小池により殺害された。3人は犯行前友人関係は無く、インターネットで知り合った者同士であった」と事件を振り返るように確認した。

続けて「この事件は背景に潜む巨悪の存在が予測される、地方訛りのある人物、白石が取り調べてくれた携帯とプリペイドカードの証拠品が事件の解決を齎すものだ」と城島は続けた。

また城島は「似顔絵から判断して、この事件の現場に居たと見られる内閣官房庁補佐官、車屋喜久治氏は相違する事件現場に現れている事を考慮すると、事件とのかかわりが有るものとみている」と付け加えた。

さらに「内閣官房庁補佐官、車屋喜久治氏については、蛭川署長が交渉してくれた結果、明後日の午後2時、桜田通りにあるホテルオーテラで任意事情聴取に応じてくれることが決まった」、「皆にはすまんが、それまでに携帯ほかの証拠を徹底調査し、新たな事実を掘り出しておいてくれ」と頼んだ。

白石警部補からは「小池の拘留期間を延長する手続きは終了し充分時間を取れるので、明日から徹底的に取り調べを再開し、新たな事実を供述させたいと思います」と力を込めた表明が有った。

本部鑑識の猪熊は「本部から森野を鑑識班に協力参加させ、最新の鑑識道具が使えるようにするので頑張ろう」と城島の補佐をした。

黒田刑事をはじめ他の捜査員は「明後日の任意事情聴取に合うよう、手分けして内閣官房庁補佐官、車屋喜久治氏のプロフィール等の情報を調べた方が良いでしょうですね」と意見を出した。

城島は「その通りだ、判断材料が有ればある程聴取の意味が有る」と捜査員達の判断に素直な気持ちで喜んだ。

城島は猪熊、白石と顔を見合わせ、全員が疲れているにもかかわらず土気に益々の高ぶりを見せたことで、自分達も奮い立つ思いを感じさせられた。

会議室の時計は午後9時を指した。

城島は「皆、この難解な事件もあと少しで解決。頑張ってくれ」と締めくくり捜査会議を終了させ、捜査員を解散させた。

一緒に署を出た城島と猪熊にいつもの元気は無く、雨上がりの生暖かい風が妙に疲れを加速させ、実行犯をあげることができたのもかわらずとぼとぼと歩み、地下鉄東京メトロ霞が関駅に辿りついた。

どちらが言い出したか定かではなかったが、疲れを取るため駅近くのサウナに寄り道し、城島と猪熊は汗を流しながら他の客に聴こえないように細心の注意を払いながら、今日までの出来事を振り返った。

風呂上がりの”生ビール”は二人の体を急速かつ完全に立ち直らせたようである。



二人は飲めば飲むほど元気がでて「今から例のバーボンを飲みに行こう」とこれまた即決した二人であった。

「お久しぶりです」といつものソムリエが迎える中、二人はカウンターに腰をかけ、米国の西部劇よろしくグラスにストレートのバーボンウイスキーをオーダーし、ローハイドを聞きながら、明日のこととも考えずにあびるほどに飲んだ。

終電が近づいたよとソムリエが教えてくれるまで気付かず飲んだ二人は漸く腰を上げ、ほろ酔い気分で家路についた。

翌朝、城島が出署すると丁度白石が小池を同行してすぐそばの比谷公園に向かうところであった。

白石は「警部、今から凶器の拳銃を押収してきます、すぐ戻りますので後お願いします」と敬礼して鑑識班の谷口と横田を同行、小池を腰縄、手錠かけをして連れ、足早に現場に向かつていった。

約1時間経過したかどうかと思える速さで白石達は署に戻って来て「警部、小池の自供どおり凶器の拳銃が見つかりました！」と報告し、「これから鑑識で精査します」と城島に伝えた。

その頃猪熊は鑑識班に本部の森野を呼び寄せ「この携帯及びブリーダーカードを調べているが協力して犯人につながる事を見つけ出せ」と命じ、自分はなにを思ったか、本庁の庶務課に電話し「鹿児島、福岡、広島、岡山、大阪、京都、名古屋、福井、富山、秋田、岩手、北海道周辺の出身者でその地方の訛りがきつい警察官を1名ずつでよいから集めることができないか」とかなり強引に訊ねていた。

白石、古田のコンビで小池の再取り調べが開始されたのは午前10時頃で有った。この様子を城島は黙って成り行きを見守るように自分のデスク周囲をクマの様にウロウロとしながら眺めていた。

午前11時になろうかとした時、鑑識作業をしていた森野、谷口、横田が猪熊とともに城島の所へきて、「携帯からは小池以外の指紋検出に至らなかつたが、プリペイドカードからは小池以外、3名の指紋が検出され、1名は女性であると思われる。しかし、いずれの指紋も前歴は無い」、「ただ、一番新しい指紋はN02の男性のもので、N01と女性と思われる指紋はそれより少し前につけられたものです」と最新指紋解析装置の結果を報告した。

城島は「うん、分かつた」とだけ答え、B 5に圧縮されたデータをファイルカバーに丁寧な収納した。

城島は「あと2日かあ」とひとり言を云いながら、自分のデスクに座りしきりにメモを取りだし、突然猪熊に「本庁庶務課からの返事はまだか？」と猪熊の目的を知っているように訊ねた。

猪熊は「急いでくれと事情を話してあるから間もなく連絡が有る………」と云いかけた時、猪熊宛に本庁庶務課の女性警務屋田から「今日の午後1時にはそちらに選定した全員を行かせることができます」と連絡が有った。猪熊は「ご協力ありがとうございます」と丁寧に礼を云い、場所と担当部署の「隅田川河口連続殺人事件捜査本部、城島警部宛にお越し願いたい」と伝えた。

約束通り午後1時には12名の地方出身者の警察官が霞が関PP署、城島警部のもとに集合した。城島は猪熊に「分かつている」と目で合図し、12名の警察官の1人づつを取調室に居る小池のもとに向かわせ「金はコインロッカーに入れてある。以後の連絡は此

方からするが、急用ができた時は東京新森スポーツの伝言欄に伝言を入れる」と全員に同じことを喋らせ、小池に聞かせた。

12名の警察官たちは捜査本部の休憩室で待機して貰い「小池、今の中に東京駅でお前が聞いた訛りを持った者がいるか？」と城島が訊ねた。

小池は「ありました。二人目の人の訛りが良く似ております、間違いありません」と答えた。

それではと城島は再度二人目の警官、九州福岡出身を取調室にはいらせ再度同じ内容の話をさせた。

小池は「この訛りに間違いありません」とはっきり答えた。

その作業が終了して、12名の警察官に概略の説明をした後「どうもお忙しいところ有難うございました」と捜査員の5名が城島、猪熊とともに敬礼して各所属署に向かうのを見送った。

こうしてついに、小池や荒木、木本に東京駅で有った人物が九州福岡の出身者であることがおよそでは有るが絞り込まれた。

一方、小池智雄の取り調べはさらに進み、犯行手法、銃の特定、真犯人にしか知りようのない凶器の隠し場所、高額預金、パソコン復元データの内容など送検に十分な自白と客観的証拠の累積が得られた。

内閣官房庁補佐官、車屋喜久治氏を任意事情聴取するまであと2日、城島は「まだ充分時間は有る、さらに事件の関連証拠を見つけられ」と捜査員のだれかれになく行動を求めた。

内閣官房庁補佐官、車屋喜久治氏のプロフィールを調べていた三田刑事達からの報告によると、車屋は東方帝国大卒、岩手県出身の68歳、衆議院議員4回当選のベテラン議員で、周辺に黒い噂もなくスキヤンダルもない政治家で官房庁補佐官を兼務しており、総理大臣（小野天昇）の信頼厚く、官房長官布施源一の信頼も厚いと有った。ただ、思想は多少右寄りの政治家であるとレポート形式でまとめてくれた。

二日後その日はやってきた。

・続きは次回の更新をお待ち下さい。

( 10 )

[戻るtop](#)

[戻る\(index\)](#)

[戻る\(sub0021\)](#)

更新：2010・06・20

## 第七章 事件は再びカオスに

事件の発覚から9日目の午後2時、桜田通りにある名門ホテルオテラ6Fの603号室を、内閣官房庁補佐官車屋喜久治氏の任意事情聴取会場とし、両隣の602号室、604号室を警備SP控え室として、任意の事情聴取は開始された。

内閣官房庁補佐官車屋喜久治は最高検察庁長官を退官して弁護士となった森本勲とマスコミに極めて強力な力を持ち、情報通で定評があり、車屋の信頼厚い私設秘書工藤保48歳を同席させた。

一方、城島は役不足の非礼を詫びながら、猪熊、三田を同席させ、調書ではなく記録としてメモすることを了承してもらった上で、事情聴取に入った。

冒頭、弁護士の森本からは「補佐官は多忙であるから、要点をまとめて要領よく質問してください」、「聴取の時間は1時間程度でお願いします」と比較的柔らかい態度で臨んだ。

城島は「わかりました、では早速質問をさせていただきますので宜しく願います」と丁寧に応じ、事情聴取は開始された。

三田は、話が始まるのと時期を同じくして、用意してきた静岡の新茶を立てた茶器を用意し、各人の前に丁寧に差し出した。

「これは、これは婦警さんに気を使わせてすまないねえ」と車屋は訛りのない標準語で礼を言った。

城島はすかさず「補佐官は岩手のご出身なのに東北弁がありませんね」と訊ねた。

補佐官車屋は「訛りがきついのは秘書の工藤君だよ……そりゃあひどい」と冗談を交えて応じた。

車屋は「ところで僕の何を知りたいんだ？」と城島に急かすように尋ねた。

城島は「先生はこの日、竹芝と芝公園の事件現場に行かれませんでしたか？」と事件を説明しながら単刀直入に聞いた。

合わせて「事件現場にはこの似顔絵に描かれた人物がきていた」と説明し、城島は「先生とそっくりに描かれていますのと、私が目撃した人物も先生とよく似ていたのですが」と詳細を交えて説明した。

城島の話聞いていた弁護士森本は「似顔絵と捜査員の記憶を持って、本人と特定するとは何事ですか！」と城島たちを呆れ顔で見るとともに叱咤した。

「まあ、まあ・・・」と森本を押さえ、笑顔で城島たちに答えようとしたのは車屋本人であった。

車屋は「その日は首相のお供を官房長から命じられ、小野天昇首相のお気に入り理髪店へ同行した帰り道、何かの事件が発生しているように見え、物好きなどころがある首相の命で、現場を見に行つたことは事実だよ」といとも簡単に答えた。

なぜと聞くまでもなく車屋が現場へきた理由を付け加えて答えたので、城島は内心うろたえ次の質問に苦慮した。

しかし城島は続けて「先生は、日ははっきりしていないのですが、約半年前、東京駅の中央コンコースで、荒木、木本、小池という若者と会つたことはありませんか？」とずばりと聞いた。

城島の質問に車屋は笑顔で「半年前といえば、周辺が忙しく、東京駅いや銀座でさえ行ったことがなく、ましてそのような若者の名前も知らないよ」と答えた。

そのとき、城島を補佐するために同席した猪熊は秘書の工藤が異常な目つきで城島を見つめていることを脳裏に記録した。

城島は質問を変え「ところで内閣官房機密費は今年になってどのくらい支出され、どのような用途に使用されたか教えてくださいませか？」と機密費の性格について、あえて知らない振りをしながら訊ねた。

それを聞いた弁護士森本は「君達も知っているだろうが、そんなことに答えられるはずがないだろう！少し法律の勉強が足りないよ」と森本としては穏やかに答えつつもりていた。

それでも城島は「ここ半年前から機密費が普段より多くなっていますか？」と覚悟して訊ねた。

少し考えるようなしぐさをした後、首を振る森本をなだめながら「そういえば普段の3倍は使っているように思える・・・なあ、工藤君」と秘書を見ながら云った。

どうやら補佐官の車屋は秘書に機密費の支出を任せているようである。城島、猪熊は心証を得た。

そこで城島は「工藤さん機密費の支出内訳を話してもらえませんか？」と願ってみた。

工藤が始めて喋ったのはそのときである。

工藤は「機密費については、情報収集が主な支出先で、国際的な秘密保持に係るので、これ以上のことは言えんちゃ」とかなり

染み付いた博多弁で答えた。

其処へ三田が「お茶を入れ替えます」と新しい茶器を用意し、丁寧にお茶を注ぎ「どうぞ召し上げれ」と頭を下げ、あいた茶器を引き取って行った。

茶器を引き取った三田は猪熊、城島の指示で、かねてより茶器を鑑識班に渡すべく用意した手提げ袋に収納した。

三田から目で合図を受けた城島は「補佐官にはお忙しいところ事情聴取に応じていただきまことに有難う御座いました。これからの捜査に大変役立ちました。本日は有難う御座いました」と聴取の終わりを告げる丁寧な礼を述べた。

城島から簡単すぎると思われる事情聴取の終わりを告げられた車屋補佐官は「貴方達に後日聞きたいことが生じれば遠慮なく私の事務所にきてくれていいですよ」と進んで捜査に協力してもよいという姿勢を示した。

たったこれだけの事情聴取であったが時間の経つのは早いもので、1時間の約束は大幅に40分ずれ込み、城島たちは失礼を詫びて補佐官達の退室を見送った。

彼らを見送った後、部屋に残った三田、城島、猪熊の3人は、「署に帰る前に少しまとめよう」と同意し、三田と猪熊が記録したメモを見ながら考えた。

最初城島が「補佐官の車屋は悪党にみえないなあ・・・あれだけ自ら説明できるし、捜査に協力的だ、その上笑顔がとてもよいと思わんか？」と感想を述べた。



猪熊は「そうだな、補佐官は事件に関係ないか知らないように思える。それに、九州福岡付近の訛りが無い、しかし気がついたと思うが、秘書の工藤は博多弁すなわち福岡だ！、それと東京駅、荒木、木本、小池の話を出したときの態度は変だったなあ」、「それに背格好は170センチぐらいの痩せ型だったよなあ」と鑑識の専門家にらしく振り返った。

三田は「警部に言われたとおり、指紋検出用の湯飲みなどの茶器は採集し、ここにありますが」と手提げ袋を見せた。

城島は「猪熊の言うとおりだ、秘書の工藤は調べてみる必要があるな」と応じ、三田には「署に帰ったら直ぐ、各人の指紋を小池の持っていた携帯のプリペイドカードにあった指紋と照合してくれ」と命じた。

城島たちが休憩をかねた打ち合わせの後、歩いて数分の霞が関P署に帰り着いたのは午後5時前であった。

心配していた上野課長が捜査本部まで来て「城島、どうだった？補佐官に疑わしいところはあったか？」と矢継ぎ早に質問を投げかけた。

城島は「課長、有難う御座いました短時間の事情聴取でしたが、先が見えました。これから捜査員全員を集めて午後5時から捜査会議をしますので一緒に参加してください」といい、全員を集めた。

冒頭、城島は「三田、谷口は茶器に付いた関係者の指紋照合をこの会議中に間に合うよう報告してくれ」と席を外して調べるよう指示した上で、「補佐官車屋68歳は事件と関係ないか知らないの

はないかと思う」と事情聴取の全容説明及び根拠を示しながら報告した。

官房長補佐官車屋の事情聴取内容の説明と各捜査員の考察に時間をかけていたところへ、三田と谷口が「一致しました、一致しました、茶器に付いた政府側3名の内の一人と例のプリペイドカードに付いていた一人の指紋が完全に一致しました」と、何時も冷静な二人が慌てて報告に来た。

事件の実行犯に連絡用として渡された、携帯電話のプリペイドカードに残った指紋と一致したことは、実行犯に指示した事件の主犯が絞られたことと理解してよいと誰もが思った。

事情聴取の結果からすると官房長補佐官車屋、弁護士森本については指紋の主と考えがたく、秘書の工藤が濃厚と思われる、城島は「よし、全員で指紋の主の確定捜査と車屋補佐官の私設秘書、工藤保48歳のプロフィール、私生活の全容、最近の行動など徹底的に捜査しよう」と決意を示し、尚「事件に至る動機の解明に全力を尽くそう」と檄を飛ばした。

捜査会議に参加した上野課長は「官房長補佐官車屋の秘書、工藤を逮捕し、取り調べたらどうか？」と提案した。

城島は「課長の判断で間違いはないと思いますが、相手は政界の中枢にいる官房長補佐官の手ごわい秘書ですから、全てを固めて逮捕したい」と強く判断を進言した。

城島がこのように上野課長の提案を否定したのは、今更ではあるが、自身の考えに確信がなく得体のしれない疑問を感じたからであった。

・続きは次回の更新をお待ちください。

( 1 1 )

[戻る top](#)

[戻る \( index \)](#)

[戻る \( sub0021 \)](#)

更新日：2010・06・21

事件の確信を握るプリペイドカードの指紋が、官房長補佐官車屋、弁護士森本、私設秘書工藤保の何れかについてはそれから約1時間立たないうちに確定した。

「やはり私設秘書工藤のものだったか・・・やはり工藤が主犯か？」と城島は呟いた。

この日の捜査会議は私設秘書工藤の身辺捜査を優先するため終了し、夕刻の7時を回っていたにもかかわらず各捜査員は会議の内容に従い、自主的に手分けして捜査に向かった。

何時もなら明日の予定を各捜査員に命じ、捜査の分担を指示する城島がそうしないで、ぼんやりと部屋の窓から暗くなった街並みを見ている姿に「城島、お前何か思う事が有るのか？」と猪熊は不安

げに訊ねた。

「うん、・・・少しな・・・」と城島は呟き「これでいいのかなあ？」と猪熊に云った。

長年の友猪熊は、城島が珍しく不安を持つていることを察知し「なら、これから私設秘書工藤に直接会って、お前の気に済むように質問をしてみてもどうだ？」とアドバイスした。

城島は「そうだな、私設秘書工藤はまだ官房長補佐官車屋の事務所にいるかなあ？」と猪熊にぼんやりとした顔をしながら云った。

機転を利かせた猪熊の動きは素早かった。

すぐ猪熊は官房長補佐官車屋の事務所連絡を入れ、まだ事務所にいた工藤に「工藤さん今日はご苦労様でした、大変参考になりました」と丁寧に礼を述べた後「率直に云いますが、貴方の指紋が犯行に密接に関連する証拠品から検出されています。つきましては恐縮ですが今から至急お会いしてお訊ねしたいことが有ります。つきましてはこちらが指定する場所までお越し願えませんか？」と普通では手の内を明かすような事をしないのであるが、言い訳できないよう単刀直入に迫った。

猪熊に圧倒された工藤は「いいですよ、どこえ行けばよろしいでしょうか？」とつい答えていた。

猪熊は「それでは午後8時、赤坂見附のレストラン”東京ナイト”までお越し願えませんか」と丁寧にお願いした。

猪熊はぼんやりと考え込んでいる城島に「考えるのは家に帰って

からにせい！」と喝を入れ「さあ行くぞ」と促した。

8時まではまだ少し時間が有ったので、城島と猪熊は歩いて約20分のところにあるレストラン”東京ナイト”まで歩きながら、お互いの考えを照合しあった。

漸く城島は「なんだかこの事件、凄惨、非情さは有るが単純すぎないか？」と猪熊に意見を求めた。

猪熊は「そういえばそうだな、殺し屋に都合の悪い文筆家を殺害させた・・・それだけのことか？」と云いつつ、城島がぼんやり考えていたのは、どうやら事件に城島特有の勘が働きたたしたのではないかと考えていた。

ストラン”東京ナイト”にはさすがに秘書稼業をしているだけあって、工藤はすでに到着し待合で待機していた。

城島、猪熊は「さすが時刻に正確ですね、見習わせていただきませう」と工藤を持ちあげた。

3人は防音機密処置を施した和室”了の間”に着席し、Aコースの和夕食を注文し、仲居が下がるのと同時に城島は「工藤さん先程猪熊がお伝えした通り、事件の実行犯小池の連絡用携帯電話プリペイドカードから貴方の指紋が検出されました。これは普通ではないですよ」と切り出した。

「どうして私の指紋と分かったんですか？」と訊ねる工藤に「捜査員は因果な職業で、事情聴取で正面切って指紋採取できない方々に対しては使用した物品についた指紋を採取させていただく習慣ができてしまっているのです」と言い訳をしているように説明した。

其処へ夕食が運ばれてきたので「先ず食事をすませましょう」と猪熊が間を取るように仕向けた。

食後のお茶を飲みながら3人の話は続けられ「理解の早い工藤さんですから、持って廻った質問はしません。工藤さん、事件の実行犯の荒木、木本、小池に会って何を指示したのですか？」と城島は率直な質問をした。

工藤は「何を云っているんですか、私はその荒木、木本、小池と云う人物を知らない。……」と伏し目がちに答えた。

城島は続けて「その人物は須田という偽名を使い、身長約170センチ程度、痩せ型、九州の福岡辺りの訛りで話すと小池は証言しているんです」とぶつけた。

その時、工藤の表情が僅かに痙攣するのを猪熊は見逃さなかった。

工藤は「私はなにも知りません。彼らと会ったことは有りません。……」と全面否定した。

城島は「工藤さん、それでは小池が持っていた携帯のプリペードカードについていた貴方の指紋についてはどう説明しますか！」と詰め寄った。

工藤は「すみませんがそのことについて、今夜一晩考えさせてもらえませんか？、忘れていたこともあるかもしれないので、思い出すよう努力しますから……」と逃げ場を失った動物の様な目をして城島達に訴えた。

工藤は言い訳するように「明日朝、皆さんの霞が関PP署に出頭してお話してできるようになりますから」と云った。

それではと城島、猪熊は要点をはつきりさせて、工藤との会談を終了することとし「明日は工藤さん、悪いですが任意の事情聴集として取り扱わせて頂いてよろしいですね」と念を押し、工藤をレストラン”東京ナイト”から送り出した。

猪熊は城島に「やはり、工藤は荒木、木本や小池と会っているな・・・明日吐くかな?・・・やはり主犯か?」と自分の思いをぶつけた。

城島は「うん、会ったことは認めざるを得ないと思う。ただどんな話をするか分からん」と応じた。

そんな話をした時である猪熊と城島はハツとお互いを見た。二人は「小池に須田という人物になり済ました工藤とどんな話をしたか充分聞いていない」と気付いた。

すぐに城島は「白石、すまんが小池をすぐ取り調べができるように準備しておいてくれ、今日中でなければ困るので宜しく頼む、すぐ帰る」と電話し、急ぎ署に戻った。

取調室の小池は就寝時間を過ぎていたこともあり、困惑した表情を隠さなかった。

城島は「須田と会った時どんな話をした?、事件被害者4名の名前を告げたか?」と最初に訊ねた。

これに対し小池は「何も聞いていない、仕事内容の連絡はこの携

帯のmailにはいる。金はコインロッカーに入れてある。金額は一人3,000万円の報酬である」としか云わなかったと述べた。

城島は何度も小池の記憶を確認し、須田と云う人物がその場では、仕事の内容について指示していないことを何度も確認した。

夜も更けだしたので、小池の取り調べはその位とし、城島、猪熊は工藤の捜査に出かけていた捜査員、留守居の白石らに「ご苦労さん皆の調査結果は明日聞かせてもらうよ」として全員の帰宅を勧めた。

署の時計を見ると既に午前1時を過ぎていた。城島と猪熊の二人は捜査本部の椅子を並べごろ寝をきめこんだ。

椅子を並べてごろ寝することはなかなか寝心地の良いもので、若い時からの習慣となっている二人としては時として家で寝るより居心地が良いようであった。

その夜は新たな事件の通報もなく署内は静まりかえり良く熟睡した城島は午前5時頃に目を覚ました。

署の手洗いで顔を洗った城島はなにを思ったか、鑑識班の部屋に行き見よう見まねの慣れない操作で指紋照合を始めた。

手がかりは偶然の中にあるとはまさにこの事であった。

不慣れな画面操作をする城島の前に偶然現れたのは、指紋の一致を示す画面で有った。そこには小池が所持していた携帯のプリペイドカードに残っていた女性らしき指紋と第3の事件被害者、福本百合子の指紋がピタリと一致していたのである。



驚いた城島は小さな鼾をかき熟睡しているように見える猪熊に「起きろ！猪熊、猪熊、見に来てくれ、教えてくれ」と持ち前の大声でたたき起こした。

猪熊は椅子から転げ落ちるようにして飛び起き、云われるがまま鑑識班の部屋に同行し、画面を見て完全に目が覚め驚愕した。

猪熊は「なぜ？・・・なぜ、福本百合子の指紋が一致したんだどこか故障していないか？」と装置のあちこちを調べた。

しかし装置の不具合もなくそれは紛れのない事実であった。二人は目を合らし「常識ではまさか被害者の指紋とプリペイドカードの指紋を調べることはしないよな」と城島の怪我の功名にしばらくの間声にならなかつた。

城島は「今日朝の、秘書工藤の任意事情聴取ではズバリこの事を突き付けてみよう」と猪熊の同意を得た。

午前6時過ぎ、白石が「いかりやの朝食弁当」を差し入れてくれた。猪熊と城島はこの弁当がこよなく好みで、時折昼飯として買ってくるぐらい愛着している事を白石は良く知っていた。

事情を聞いた白石は次々と出署してくる捜査員にこの重大な話を伝えたが、誰もが驚き「なぜ、どうして？」と云うだけで、踏み込んだ意見考察は出なかつた。

其処へ元気よく出署してきた、新人刑事の古田が事情を聴くと同時に「第3の事件被害者、福本百合子宅には私と猪熊警部が安否確認に行っていますので、猪熊警部は後のことでお忙しいと思います

ので、どなたか指図頂ければ今すぐに同行して、福本百合子の全容を詳しく調べてきます」と志願した。

それではと城島は古田に三田、黒田、中家、横田の5名で徹底的に全容を調査するよう命じた。

命を受けた捜査員達は早朝にもかかわらずすぐに2台の緊急車両に分乗して、福本家及び関連先へ捜査に向かった。

朝9時丁度に秘書の工藤は約束通り、霞が関PP署に任意聴取を受けるため出署してきた。

城島と猪熊が丁重に迎える中、工藤は取り調べ室に入った。

工藤の任意聴取には城島、猪熊、白石が立ち会い、白石が調書を記録することにした。

城島は「早速で悪いですが、昨日の話を確認させてもらいます。なぜ事件の実行犯小池の携帯プリペードカードに貴方の指紋が有ったのか説明して下さい」と冒頭に率直な質問をした。

工藤は意を決したように「実は、荒木、木本、小池とは半年前、東京駅の中央コンコースで会ったのは私です」と認めた。

城島が「なぜ彼らと会う必要が有ったのですか？」とすかさず聞いた。

工藤は「金を収納したコインロッカーのカギを渡すこと、連絡用プリペード式携帯電話を渡すことが目的でした」と答えた。

城島は「その時1から4の事件を契約、殺害依頼をしましたか？」と続けて質問した。

工藤は首を大きく振って「そのようなことは一切していません」と少し声を荒げて城島の質問に答えた。

「私は有る事情が有って彼らに会うことと金の所在を教えること、連絡用の携帯電話を渡すことをしただけです」と事件の関与を否定した。

城島は「ある事情とはなんですか？説明して貰えませんか？」と訊ねた。

工藤は「内閣官房に関わる事情ですから、たとえ警察でも説明は不要と聞いています」と胸を張った。

城島はそれ以上追及せず、今でなくても必ず話をさせるといふ信念から次に移った。

城島は「金は一人当たり3,000万円の大金ですが、この金の出所はどこですか？」と訊ねた。

工藤は「それについては私の口から申し上げることはできません。また説明しなくても良いものです」と答えた。

城島は「それでは工藤さんは事件と一切の関わりは無いとおっしゃるのですか？」と聞いた。

工藤は「その通りで間違いありません」と言明した。

城島と猪熊は目で合図するように「それでは話を変えますが、小池の持っていたプリペイドカードには貴方の外、第3の事件被害者で辛口著作業の福本百合子の指紋が検出されているのですが、彼女について思い当たることは有りませんか？」と隠し玉の質問をした。

工藤は少しの間と大きな息をしたうえで「名前は知っていますが会ったことは有りません」といかにも不自然な印象を与えた。

城島は「会ったことのない人の指紋が、貴方が実行犯に渡した携帯のプリペイドカードになぜついていたんでしょう？不思議と思いませんか？」と突っ込んだ。

工藤は「分かりません。そのようなことを調べるのが警察ではないのですか」と開き直った。

城島はこの段階で、工藤を事件のほう助罪で逮捕できると思いがらも「工藤さん度々ありがとうございます。またご協力をお願いします」とあえて行使することをしなかった。

城島達が工藤を送り出した時、その背中からは時の首相小野天昇の強力な権力を背景とし、巨大な力を持ち示す内閣官房庁補佐官の私設秘書としての威厳は消え失せていた。

・続きは次回の更新をお待ち下さい。

( 1 2 )

[戻るtop](#)

[戻る\(index\)](#)

[戻る\(sub0021\)](#)

## 第八章 事件は核心に触れた

その日の午後4時、捜査会議は再開された。

先ず、内閣官房長補佐官車屋の私設秘書工藤保48歳の調査結果が捜査員を代表して白石から「北九州大学法学部出身、両親はすでに他界、現在は世田谷区在住、妻と中学、高校の息子の4人家族、政府内では官房長官をしのぐ政策実力者と云われ、野党、右翼、マスコミ関係者に精通し影の総理と呼ばれている。特にマスコミからの信頼は極めて大きく、政府筋の記事は全て工藤からの発信を掲載している模様、行動は不明なところも多く、とにかく外出が多いことと知られる、また特に調査したところでは内閣官房機密費を一手に握る切れ者と評価する人物が多く、首相、小野天昇の特命マスコミ対策大臣と呼ばれている」と報告があった。

続いて福本百合子を捜査した捜査員を代表して古田は「福本百合子56歳、葛飾区在住、各省庁批判で知られる公務員出身の著述業、赤坂女子高校卒業後、奥山大学教養学部に進学し卒業、公務員として勤務後3年前に独立、仕事上同業者との意見対立によるトラブルも多く、また独立後に設立した出版社の営業不振が続いていたと同業者情報があり、家庭では無職重度障害者の夫、私学に通う長女の3人家族、約8か月前に癌を患い、入退院を繰り返し、担当医の話では余命1年を宣告されていた模様、また、調査の結果、本人は最近発売された”不慮の死亡保険”に約1年前に加入、保険対象額は9億円であり、間もなくこの事件で死亡したため全額支払われることが保険会社の調査員から報告されています」と要点を報告

した。

二人の報告を聞いていた城島は「赤坂女子高校と云えば、須田と云う人物が使用した」アンダーグラウンド”登録アドレスの職員室代表アドレスがあった高校ではなかったか？」と三田に訊ねた。

三田は「そうです須田はサイトにそのアドレスを登録していました、間違いないです」と明瞭に返した。

城島は「事は重要なカギを持ちそうだが、お前の手で直接調べてきてくれんか？」と信頼する猪熊に捜査を依頼した。

城島の勘を察知した猪熊は「捜査会議の途中だが、あとはよろしく頼む」と城島に伝え、森野を同行して赤坂女子高校に向かった。

猪熊に「頼む」と云った後城島は「癌で、余命宣告を受け、異常と思われる高額保険に加入していたことはなぜだ？」と捜査員全員に問いかけた。

その時城島は福本百合子の事件現場で感じた死体の違和感と佐藤検視官の「不思議なことに抵抗した跡が見られない」と云った言葉を思い出していた。

捜査会議はそのあと各捜査員の疑問とする点、工藤と福本のプロフィールなどの確認検証などを続けていた。

赤坂女子高校に出向いた猪熊から城島に第一報が入ったのはそれから間もなくであった。

「城島、福本百合子は赤坂女子高校に約1年前から講師として勤

務し、生徒に社会科目を教えていたらしい」と報告し、さらに「職員室のパソコンは頻繁に使用していたらしくmail履歴もそのまま残されている」と云った。

ただ、「一部mailやインターネット閲覧履歴は削除されているものが多くみられる」と報告した。

城島は「福本の形跡がないか調べられんか？」と猪熊に訊ねた。

猪熊は「令状の必要はないようなので、パソコンをもう少し調べてみる。ただ、後日の為福本が使用したと見られるパソコンが見つければ正式に押収手続きを取った方がいいかもしれんな」と捜査をしながら連絡した。

城島は「古田、もう一度福本家に行つて、百合子の使用していたパソコンを預かってきてくれ」と令状なしで古田に頼んだ。

古田は「分かりました多分理解してもらえますので預かってきます」と自信ありげに答え、福本家に向かった。

一方城島は手違いを恐れ、黒田に命じ、パソコンの押収令状を2通用意するよう万全を期した。

捜査会議は休憩に入り、各捜査員は今までの捜査内容を纏め、休憩後に再開する予定の会議に間に合わせるよう準備していた。

其処へ猪熊より早く帰着した古田の腕には大事そうに一台のパソコンが抱かれていた。

三田と谷口は早速古田を同行して、鑑識班の部屋に行きパソコン

の解析を始めた。三田は「データは削除されていないね」、「これだと福本百合子の全てが分かるね」と云いながら調査を続けた。

しばらくして猪熊と森野が帰着して「城島、福本の形跡とすればこれくらいしかなかった」と、猪熊がどのように話をつけたのかわからないが、森野の腕にはしっかりと一台のパソコンが抱かれていた。

押収令状不要で福本が使用したパソコン二台は集められ、鑑識班での解析作業は時間を惜しむように進められた。

三田と森野がほとんど同時に「アンダーグラウンド」のチャットに参加した須田と云う人物は福本百合子です！須田の名前でパスワードなどのログインに必要な暗証番号が両方のパソコンに残っています」と叫びにも似た声で城島に報告したのはそれから間もなくの事であった。

城島は「何だって？もう一度言ってくれ、須田と福本が同じなのか？」と聞き直した。同時にバシツと自身の足を叩き「須田は女性だったんだ・・・男ではなかったんだ」と始めて気がついた。

そして「須田は福本百合子だったんだ」と特定することができたのである。

しかし待てよと城島は「須田つまり福本は殺されている、なのに福本が死んだあとに荒木、木本は須田と条件交渉をしている・・・そのあと小池に荒木、木本の殺害依頼をしている・・・死んでいる人間が・・・どうして？」と云う矛盾に気がついた。

訳が分からなくなりそうになった城島の肩をポンと叩いたのは霞が関PP署の、あの蛭川署長であった。



蛭川は「女の須田と、男の須田がいるのではないか？」と城島をサポートし、そばにいた猪熊に「少ないがこれで皆、お茶でも飲んで休憩しろ」とポケットから3万円を取り出し手渡し、捜査本部を出て行った。

城島達は署長の計らいに金額以上のものを感じるとともに、署内の出来事を見通すさまを目の前にして感心と敬意を持って見送った。

城島は署の地下の喫茶から皆にコーヒーなど好きなものを取らせるとともに、猪熊と二人は「なるほど、須田が男と女か・・・そう考えればこの事件説明がつかぬ」とついに事件解決に踏み出せたのであった。

即ちと城島は「最初から気になっていたんだが、福本百合子に抵抗した様子が待たなくなかった。それと福本の現状は多分自殺もやむなしという精神状態であつたらう。それで”アンダーグラウンド”に登録し、自分を殺害するために、無関係の金目当てで何でもする相手を探したんだ」、「家族には重度の障害者があり、私学に通う子供もいる。仕事は旨くゆかず、また同業者から妨害されているという被害者意識があつた。」、「殺人被害者で有れば9億の保険金が行りる、家族は安心して生活できる、自分はあと少ししか生きることができない、家族を守れない」、「同業者を隠れ蓑に殺害することで完全犯罪を計画した」と想定した。

「では、荒木、木本を小池に殺害しろと命じたのは誰か？」と猪熊は自分の想像を抑えて城島に訊ねた。

城島は「それは男の須田つまり工藤だ」、「彼は何かを荒木、木本に握られ身元が割れそうになったのと条件交渉が出てきたので、

この際致命的な事が起こらないうちに始末しようと小池に依頼した」と説明した。

「工藤は望月、墨田、福本、金子、4人の殺害事件を知らなかったのか？知っていたのか？」と猪熊は城島に迫った。

城島は「事件が報道されるまで工藤はなにも知らなかったと思う」と云い「なぜなら、東京駅で彼らと会った時の小池が供述した内容と工藤の供述に相違点が全くないので」と説明した。

ではと猪熊は食い下がるように「4人の殺害は誰がどのように指令したのか？」と続けて城島を攻めた。

城島は「それは福本のパソコンを調べればすぐに出てくると思うが、自分を含む殺人計画を伝えたのは須田と云う男に化けた福本だと確信するように述べた。

このような話をしていた丁度其処へ、三田、森野、谷口、古田が来て「城島警部、福本の自宅パソコンからは削除はされていましたがハードディスクを復元してみたところ、仕事の指令と題して、殺害相手の顔写真、住所、電話番号など本人を特定できる指令書データが出ました。」、また「この指令書はプリペイドカードを使う携帯データに圧縮され、木本、荒木、小池に携帯mailで送信されたことを裏付ける資料が明瞭に残っていました」と理解が充分ではない様な表情をして報告した。

休息を取っていた捜査員達は城島が猪熊に説明する内容をじつと聞き、城島が次の行動を示すのを待っていた。

時計を見るともう午後9時を過ぎていた。どうやら今日も家に帰

ることができない雰囲気になってきた。

城島は猪熊、白石、三田、森野、谷口、古田の自分を入れて7名の捜査員を残し、他は明日もあるからと帰宅させることにし、残った捜査員に「もう少し付き合ってくれ」と2台のパソコンの精査を頼み猪熊との話を続けた。

城島は「ところで工藤が小池に荒木、木本の殺害指示したのはどのような方法で連絡したのか？、どう思う？」と猪熊に質問した。

猪熊は「お前の今まで説明した事が全てで有れば、足がつくような連絡方法はとらんだろ？」と云いながら「多分、東京新森スポーツの伝言欄とプリペード式の携帯電話を利用して接触したんだろう」と云った。城島も「そうだろう」と同意した。

城島は「東京新森スポーツに確認して、須田に化けた工藤が小池に連絡を取っていないか調べておく必要があるな」と云いながら、そばにいた白石に調査をするよう依頼した。

それと城島が「福本と工藤の接点、なぜ工藤は須田と云う偽名を使用してまで福本の希望に沿ったのかな？」と猪熊の意見を求めた。

猪熊は「それは福本の仕事と関係するのではないか？、工藤にしてみれば福本は何時も周辺を飛び回る煩い八工の様なものでなかったのではなからうか？餌をやって静かにさせていたところが、それをネタに脅され協力したのではないか？」と金を自在に使える工藤の立場を連想してみせた。

城島は「これから先は腹を括って工藤に立ち向かわなければ分か

らんな」と自分に言い聞かせるように呟いた。

其処に、森野が「猪熊警部、プリペード式携帯は最近規制が厳しくなつて、個人の特定ができないと購入することができないという建前になっています。ひよつとすれば、小池の所持した携帯も工藤が使った携帯も出所は同じかもしれませんね」と意見を出した。

「今からでも小池の所持した携帯の販売店に行き調査してきたいのですがよろしいでしょうか？」と城島に訊ねた。

城島は「古田も一緒に連れて行け」として遅くからの捜査に頭を下げた。

その時は、この森野が言い出した捜査がタイムリーヒットにつながると城島、猪熊とも思っていなかった。

若い森野と古田は販売店が営業時間を過ぎて閉店してしまうのを恐れ、パトカーで赤灯サイレンをつけて緊急出勤し、約10分先にある東銀座の”携帯プリペ”に向かった。

二人は約8分後には”携帯プリペ”の店内にいた。

警察手帳は古田が提示し、応対に出てきた店長に「福本百合子さんが買い入れたこのプリペード携帯はここで販売されたものですね」と確認した。

店長は「ええ、福本さんが買われたプリペードに間違いありません。福本さんは当店のお得意様でこの外にも何台も買っておられます」と云った。

すかさず森野は「どんな携帯を買っていたのですか？」と訊ねたところ、店長は「今までこれだけのプリペード携帯を買っておられます」と言っ二人に見せたりリストには12台のプリペード携帯電話が記載されていた。

森野と古田は店長に「これらの携帯は番号表示はありますか？」と訊ねた。

店長は「番号表示は有りませんが通話記録はプリペードといえどもあります」と答えた。

二人は顔を見合わせ、「店長、この電話の通話記録を見ることはできますか？」と小池から押収した携帯を見せた。

「ああ、出来ますよ貸して下さい」と森野が持つ携帯を預かり、その場で携帯のプリペードカードを引き抜き、本体にUSB端子の様なものを差し込み小さなユニットにセットした。

数秒後「これが記録です。コピーしましょうか？」と店長は云って最近1週間の記録をコピーしてくれた。

森野は「この通話記録の中にこの店で福本さんに販売した他のプリペード携帯は有りますか？」と訊ねた。

店長は少し待って下さいと言って特殊な記号で記録された通話記録を調べた。

「ありますね、内容は分かりませんが、約10日前から毎日のように福本さんがお買いになった別の携帯からかかってきています」と答えた。

どのように調べるのか古田と森野は店長から教えてもらい、店長の好意でユニットを預かり急ぎ捜査本部に戻ることにした。

署に戻った二人は元気よく階段を駆け上り、城島と猪熊の待つ捜査本部に駆け込んだ。

汗をかいて戻ってきた二人に城島は「どうした、ヒットでホームに戻ることはできたか？」と冗談半分に訊ねた。

二人は思わず噴き出しながら城島の冗談を聞き流し「警部、小池の携帯には福本の買った別の携帯から度々通話があります」と「携帯プリペ」の店長が協力してくれた内容を報告した。

城島は「うん、よく調べてくれた有難う」と礼を云うとともに、猪熊に「さてこの努力にどう報いるか、どう進めればいいか？」とアイデアを求めた。

猪熊は「小池に須田からの電話がいつ頃どのくらいの時間あったかを取り調べそれを根拠に工藤を攻めよう」と提案した。この事については翌日小池を取り調べたところ、「このところ毎日のように電話があった」と答えたのは記述するまでもない。

やはり今日も家に帰れない猪熊と城島は東京新森スポーツに出かけた白石の帰りを待たず、終電に間に合うように居残りの捜査員全員を帰らせた。

しばらくして白石は帰着した。

城島と猪熊は「ご苦労さん、遅くにすまなかったな」と労う事を

忘れなかった。

白石は「東京新森スポーツにはここ10日の間に須田から小池と云う伝言で、午後8時に電話するとか午後10時に電話する等と記載があり、投稿者は店頭受付に来た背の高い痩せ型の男性で須田と名乗ったようです」、「須田と云う人物は顔を隠すことはなくメガネやサングラスも使用していなかったとのことで、顔を見れば分かりますと答えました」と報告した。

白石や古田、森野の報告を聞いた城島は明日早朝に小池を取り調べ、証拠を照合したうえで、工藤を任意事情聴取するか上野課長に依頼して逮捕状を取って貰い逮捕に踏み切るか今夜じっくり考えようと猪熊に相談した。

白石の終電が間に合う事を確認してから白石を帰宅させ、城島と猪熊は昨日と同じように椅子を並べたベッドに横たわった。

いつになく猪熊が明日の捜査の作戦を考察しては断片的に城島に説明するので、眠るチャンス逃しあと1時間もすれば日の出を迎えるまで目が冴えてしまった城島警部と猪熊警部であった。

「おはようございます」と云う声で二人は飛び起きた。傍らに立っていたのは三田刑事であった。

署の洗面所で顔と二日の泊まり込みで汚れた体をタオルで拭き、三田が気を使い買い求め持参してくれたシャツに着替えた城島と猪熊の二人は何度も礼を云いながら、署の食堂で朝食をとった。

午前8時半、小池を取調室に移し携帯電話の時系列の調書を取った。そのデータは白石が昨日東京新森スポーツ見た伝言板に記載さ

れた時刻と一致して須田から小池に電話があつた事を示していた。また、森野、古田が調べた通話データとも一致し、福本が買い入れた携帯を使用したことも判明した。

一方白石は東京新森スポーツに連絡し、昨日の店頭受付の担当者に容疑者の取り調べの際には面通しをお願いするとして了解を求めた。

城島と猪熊は上野課長の部屋を訪れ、工藤の逮捕に踏み切ることを提案し、逮捕状を取り寄せてもらうよう依頼し、逮捕状は午前10時に城島達の手に渡された。

：続きは次回の更新をお待ち下さい。

( 1 3 )

[戻る top](#)

[戻る \( index \)](#)

[戻る \( sub0021 \)](#)

更新日：2010・06・23

## 第九章 事件の終結と残る不安

城島、猪熊、白石の3名は永田町にある官房長補佐官車屋の事務所に同日午前11時に入った。そして城島が「カウンターの中央で、工藤保、貴方を荒木孝三及び木本新二委託殺人並びに隅田川河口連続殺人ほう助容疑で逮捕します」と腹から絞り出すような大声で逮



捕状を右手に持ち相手にさし出すようにして閲覧を要求した。

驚いた工藤は「なぜだ！私はなにも知らない関係ない……」  
と慌てふためきわめいた。

こうした状況に対応して城島は白石に命じ逮捕時間の通告と手錠をかけた。尚も体をくねらすように抵抗する工藤の腰に縄をかけ事務所から外に連れ出し、パトカーの後部座席に両サイドを城島と猪熊が固め、白石が運転する赤灯サイレンをつけた緊急車両にして霞が関PP署に連行した。

工藤は即刻取調室に連れおかれ、城島と白石が取り調べを担当し、黒田が書記を務めた。

城島と白石は交互に工藤を攻め「あなたが小池に須田と名乗って、福本百合子から与えられた携帯から電話したのは記録から明らかだ」、「福本との関係は何だったんだ？なぜ携帯を福本からもらい死んだ荒木や木本、生存の小池に須田として連絡したのか？」、「福本に利用される弱みがあったのか？」と詰問した。

突き付けられた証拠の全てを否定する力はすでに消え失せ、工藤に残された道は自供すること以外残されていなかった。

工藤は観念したように「福本は、自分がしてきた官房機密費のマスコミ対策、特にノンフィクションとして論戦をしかける作家達全員に機密費を配分し、黙らせようとした事を広く一般に知らせると脅され、このような結果になるとは知らずに官房機密費を荒木、木本、小池に渡す役目を引き受けたのです」と福本の本当の目的を知らずに男の須田を演出した事が明らかになった。

城島は「荒木、木本を小池に殺害依頼したのは間違いはないんだな」と念を押すように確認した。

工藤は「荒木と木本は私を連絡時に脅してきました。身元も分かっているよ……」と云い「報酬を上乗せするよう要求してきたので、今後の事を考え小池に仲間割れさせ殺害を依頼したのです」、「小池は私が直接殺害する機会を探っており、所在を調べていました」、「ただ、福本がなぜ殺害された中にいたのか今まで理解できませんでした」と権力を持って行使してきた人物と思えない素直な答えをした。

城島は「福本も須田を演じていたんだ、mailでは女も男になり済ますことができるからな」と工藤の疑問を解いてやった。続けて「お前さんが小池に荒木、木本の殺害を依頼しなければ委託殺人罪に問われず、福本の囑託殺人ほう助で済んだのになあ、内閣官房機密費の黒い力はそれほどの焦りを生んだのか」と尋問ともつかない事実確認をした。

城島は「使用した携帯は今どこにあるか」と工藤に訊ね、工藤は「事務所の工藤の机の引き出しにある」と観念した様子で供述した。

白石は部屋から出て中家刑事、沖本刑事に命じ証拠品の回収にあたらせた。

城島は工藤に「官房機密費はどんな使われ方をしてきたのか？」と訊ねた。

工藤はしばらく押し黙っていたが「機密費の用途については、歴代の取扱者はその用途について墓場まで極秘を通すことが建前になっています。しかし、自身の反省として申し上げますが、外国機密

情報入手費用、要人の失脚、暗殺、国内メディアの情報操作、右翼、左翼対策、コメンテーター対策、国民への情報流布、政敵対策、司法対策、検察対策等の費用として時の国家を預かる政党の都合により随時任意に使用されてきたものです」と証言した。

一方、部屋の外では猪熊が東京新森スポーツの店頭受付担当者にハーフミラーを挟んで面通しを実施、間違いなく本人と確認した。

工藤は何の反論もできずに事件の全容を認め、完全自供した。

こうして工藤は荒木、木本の委託殺人を認め、結果的に福本の囑託殺人をほう助した罪を認めざるを得なかった。

一方小池は隅田川河口連続殺人及び荒木、木本の殺人実行犯として確定し、工藤とともに送検された。また、福本百合子は被疑者死亡のままとして、望月、墨田、金子の委託殺人容疑、保険金の詐欺未遂容疑として送検された。

事件は内閣官房機密費をよく知る福本百合子によって引き起こされたものであるように見えるが、彼女に長年にわたる官房機密費の黒い部分を見透かされた結果、内閣官房が自ら官房機密費を使用し、囑託殺人を繰り返した事が最大の原因であると、霞が関PP署の城島警部ら捜査本部の捜査員達は明らかにしたが、それを超える立件には法の壁が立ち塞がり、関係者、組織を訴追することができず、後日、従来ドッキリ機密費の甘い汁に群がって来たTV、新聞等の各メディアは、事件の真相を話題としてさえ取り上げ無いばかりか正義に及ぶ報道、論説等もすることは無かった。

このように事件は云いようもない不安を残して解決した。

取調室を出てきた城島を待ち構えたように署長の蛭川は部屋に呼び「お前達は俺の誇りだ、目に入れても痛くない優秀な部下だ」と喜びを同席した上野課長とともに伝えた。

城島は「署長本当に目に入れても痛くありませんか？」と冗談で訊ねた。すると蛭川は「ああ、痛くないとも、すぐに目に入れてあげるよ」と席を立ち、驚く城島をしり目に、蛭川が事件解決を祈願して用意しておいた、片目が空いた大きなダルマの目に墨を入れ、入れたぞと云わんばかりの表情をしてニッコリ笑った。

このように難解な事件は漸く解決終了したが、蛭川署長、上野課長と城島の胸には妙な危機感が溢れていた。それは、金のためなら簡単に殺人を犯す獣以下の人間が街にあふれ、国民を守るべき本来の政治はビジネス化し、内閣官房にはこの国にしか見られない、何の制約もなく自由に使える闇の資金が機密費として存在し、時にはマスコミ誘導によって世論構成をするために使われ、時には都合の悪い政敵の抹殺に使用され、時には裏社会に黒い資金を提供し、時には社会的弱者でさえ抹殺するため等に使用される強大な力の資金が税金と云う公金で構成されているという矛盾を感じたからであった。

例えば、内閣官房機密費と云う訳のわからない、時の権力者とその配下、政党等が自由に使うことのできる資金を持つ限り、犯罪のアレンジは限りなく存在し、この事件が示したものはほんの氷山の一角事例であり、例えば、内閣官房や最高権力者自ら及びその関係者等が、汚れきった犯罪に利用しても世間を欺くことはいとも容易に可能である事を示唆し、今後も姿を変えた事件はあとを絶つことができないのではないだろうか？

それでも今我々はその社会に住み続けることを余儀なくされてい

る。城島警部や猪熊警部達はこの事を肝に銘じ、顔を真つ赤にして  
”仁王”いや”閻魔”の顔になって今日も事件を追いかけている。

( 14 ) E N D

戻る t o p

戻る ( i n d e x )

戻る ( s u b 0 0 2 1 )

最後までお読みいただき有難うございました。

第九章は後日内容を編集し直す場合がありますことをご了承くだ  
さい。

また近いうちに城島警部の活躍を再び記載しますので宜しく願  
いします。

尚、今後の参考にさせていただきたくご意見を頂ければ幸多に存  
じます。

作者 徳永信行

戻る t o p

戻る ( i n d e x )

戻る ( s u b 0 0 2 1 )

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3279m/>

---

内閣官房機密費殺人事件

2010年10月10日04時15分発行